第52回東海北陸中学校長会研究協議会

愛知大会研究集録

平成24年7月5日(木)・6日(金)　名古屋国際会議場

Aichi Quality
ものづくり愛知

東海北陸中学校長会・愛知県小中学校長会

目　次

大会を終えて …… 1

大 会 要 項 …… 2

全 体 会 Ⅰ …… 5

分　科　会

◆第１分科会 …… 8

◆第２分科会 …… 12

◆第３分科会 …… 16

◆第４分科会 …… 20

◆第５分科会 …… 24

◆第６分科会 …… 28

◆第７分科会 …… 32

◆第８分科会 …… 36

記 念 講 演 …… 40

愛知大会スナップ …… 58

全 体 会 Ⅱ …… 59

理事会報告 …… **未掲載**

分科会担当者一覧 …… **未掲載**

愛知大会運営組織図 …… **未掲載**

平成24年度役員名簿 …… **未掲載**

第52回東海北陸中学校長会研究協議会 愛知大会

大会を終えて

東海北陸中学校長会
会 長 仁 科 正 二

第52回東海北陸中学校長会研究協議会愛知大会を、東海北陸７県から1,100名を超す会員の皆様にお越しいただき、この愛知県で開催することができました。参加された会員の皆様方のご協力により有意義な大会となったことに深く感謝するとともに心よりお礼申し上げます。

私ども愛知県小中学校長会は、大会開催に向けて県内411名の中学校長を中心に、準備委員会・実行委員会を組織し、大会を実りあるものにするために何度も打ち合わせを行い、運営要項を２年以上かけて確認し合い作り上げてきました。さらに、各担当部会の委員を中心に、「おもてなしの心を大切に」というキャッチフレーズのもと活動をしてきました。開催を契機に、県内の中学校長が今まで以上に組織力を意識し行動する「つながり力を高め、共に行動する」校長会へと成長できました。今大会の開催が愛知県小中学校長会にとって大きな経験になったと実感しています。

また、研究協議そのものを通して各県の校長同士の交流をより深めたいと考え、グループ協議にも取り組みました。発表者はもとより、司会、記録、運営に関わっていただいた皆様やグループという少人数の協議に積極的に参加していただいた皆様のご尽力に改めて感謝申し上げます。各県からお寄せいただいた「愛知大会」についてのご意見・ご感想等を読ませていただくと、私どもの思いが参加された会員の皆様に届いていることが伝わってきました。「挑戦してみてよかった」というのが素直な感想です。

講演会は、愛知県を代表する人物ということで「素直な心が才能を伸ばす！」と題してフィギュアスケートコーチ　山田満知子氏　を講師にお招きしインタビュー形式の対談という形で進めました。お話の内容は、指導者としての立場から、「全日中ビジョン―学校からの教育改革」を進めていく一助になったものと思います。

最後に、愛知大会の開催にあたり、参加された会員の皆様、大会運営に関わっていただいた方々に感謝申し上げますとともに、様々なご指導とご支援を賜りました愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、全日本中学校長会並びに関係諸機関の皆様に心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。

大 会 要 項

1　研究主題　「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え
社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育」

2　基本構想

今日、我が国は少子高齢化・知識基盤社会化・グローバル化など社会の急激な変化の中にあって、日々の生活基盤までもが大きく変容し、物質的な豊かさの一方で人間関係の希薄化や雇用の不安定化などにより、日常生活で心の豊かさを実感できずにいる状況がある。

中学校教育の現状をみると、いじめや校内暴力、不登校などの解決・解消が引き続き重要な課題となっている。また、学力の向上はもとより、家庭や地域社会との連携を一層強化し生徒の学習や生活の基盤づくり、規範意識の育成、すべての活動の源である体力の向上など、健やかな心身の育成が学校教育に求められている。

平成18年12月の教育基本法及び平成19年６月の学校教育法等の関係法令の改正、さらに平成20年１月の中央教育審議会答申を受けて学習指導要領が改訂され、中学校では平成24年度に全面実施となった。これまでの「生きる力」の理念は引き続き継承され、基礎的・基本的な知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力等の育成、豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実など、今後、各学校における具体的な実践とその成果が期待されるところである。

これまで、生徒の「生きる力」の育成を目指し、地域に開かれた特色ある学校づくりを進めてきたが、これからはさらに実社会とのかかわりを重視し、社会において自立的に生きる日本人としての基礎を培い、社会の形成者として生きていくための総合的な力（人間力）の向上を図っていかなければならない。そのためには、学校の教育力（学校力）と教師の指導力（教師力）を高め、知識・技能を確実に習得させるとともに、それらを実際の生活や学習に活用する力、さらには生涯にわたって諸課題を探求し解決していく力を育成することが大切である。また、我が国の将来を担う生徒は、豊かな人間性と創造性を身に付け未来を切り拓いていくことが求められている。そのためには、生徒一人一人の自己実現を図るとともに、主体的に社会の形成に参画し、我が国の伝統と文化を基盤として、国際社会に生きる誇りある日本人を育てることが重要である。

東海北陸中学校長会は「全日中教育ビジョン―学校からの教育改革」を指針とし、校長が学校経営の最高責任者としての使命感や確固たる教育理念とビジョンをもち、これらの課題解決に向けリーダーシップを強く発揮するとともに、地域住民から支持され信頼される学校の創造に努めなければならない。

そこで、平成24年度第52回東海北陸中学校長会研究協議会愛知大会においては、「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育」を主題に研究協議を通して研究を深めたい。そして、その成果とさらなる課題をお互いに共有しながら、実践を積み重ね、我が国の中学校教育の向上に資して、広く国民の信託に応えたい。

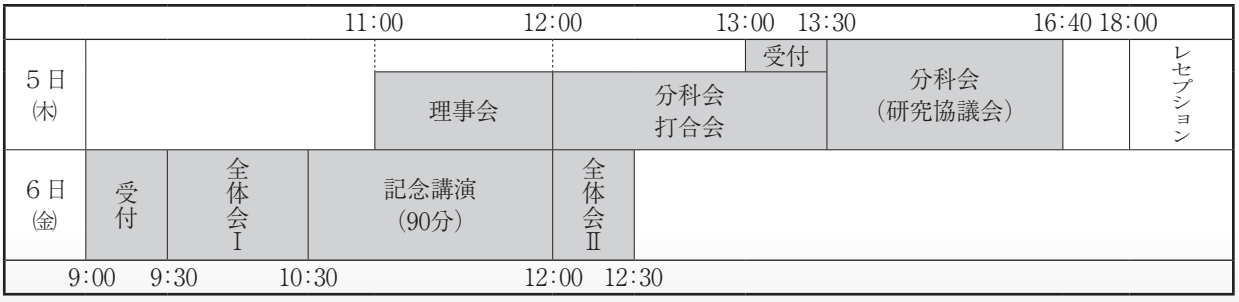
3　主　催　東海北陸中学校長会　愛知県小中学校長会

4　後　援　愛知県　愛知県教育委員会　名古屋市　名古屋市教育委員会　全日本中学校長会

5　期　日　平成24年７月５日㈭～６日㈮

6　日　程

⑴　７月５日㈭・６日㈮の全日程



(2)　７月５日㈭の日程　　● 会場…ＡＮＡクラウンプラザホテル・名古屋国際会議場

理事会	分科会打合せ	分科会（研究協議）	レセプション
11：00～12：00 ANAクラウンプラザホテル グランコート名古屋	12：00～13：30 名古屋国際会議場	13：30～16：40 名古屋国際会議場	18：00～20：00 ANAクラウンプラザホテル グランコート名古屋
○ 開催県会長挨拶 ○ 23年度会務・会計報告 ○ 24年度事業計画・予算 ○ 大会宣言・決議文 ○ 愛知大会概要説明 ○ 次年度開催県より ・福井県（基本構想等）	※昼　食 ○ 挨拶 ○ 分科会の流れ確認 ・司会者、発表者との打合せ	○ 開会の言葉･司会者挨拶 ○ 研究協議 ・口頭発表 ・文書発表（冊子） ・研究協議 ・司会者まとめ ○ 閉会の言葉	○ 参加者 ・各県理事 ・大会運営委員 （愛知県）

(3)　７月５日㈭分科会会場および研究協議題、発表、司会の分担

● 分科会会場…名古屋国際会議場

分科会	会　　場	研　究　協　議　題	口頭発表	司　会
第１分科会	１号館４階 レセプションホール	創意工夫を生かした特色ある教育課程の編成・実施	三重・富山	三重・愛知
第２分科会	１号館４階 141・142	確かな学力の定着を図る指導と評価	石川・愛知	石川・愛知
第３分科会	２号館３階 232・233	社会性や豊かな心を育む道徳教育の充実	静岡・愛知	静岡・愛知
第４分科会	２号館３階 234	健やかな体の育成を図る教育の充実	岐阜・福井	岐阜・愛知
第５分科会	４号館３階 431・432	自らの生き方を考え主体的に進路を選択する指導の充実	富山・三重	富山・愛知
第６分科会	２号館２階 222・223	学校生活に適応し豊かな学校生活を築く指導の充実	石川・愛知	石川・愛知
第７分科会	２号館２階 224	教師力の向上を目指した研修の充実	福井・静岡	福井・愛知
第８分科会	２号館１階 211・212	時代の要請に応える学校経営の充実	三重・岐阜	三重・愛知

● 分科会打合会場および担当者…名古屋国際会議場

分科会	会　　場	担　当　者		
		口頭発表	文書発表	司　会
第１分科会	１号館４階　143	三重・富山	静岡・福井・岐阜・石川・愛知	三重・愛知
第２分科会		石川・愛知	静岡・福井・岐阜・三重・富山	石川・愛知
第３分科会	２号館３階　231	静岡・愛知	福井・岐阜・三重・富山・石川	静岡・愛知
第４分科会		岐阜・福井	静岡・三重・富山・石川・愛知	岐阜・愛知
第５分科会	４号館３階　437	富山・三重	静岡・福井・岐阜・石川・愛知	富山・愛知
第６分科会	２号館２階　221	石川・愛知	静岡・福井・岐阜・三重・富山	石川・愛知
第７分科会	２号館２階　225	福井・静岡	岐阜・三重・富山・石川・愛知	福井・愛知
第８分科会	２号館１階　213	三重・岐阜	静岡・福井・富山・石川・愛知	三重・愛知

(4)　分科会参加人数

県　名		福 井	三 重	石 川	静 岡	富 山	岐 阜	愛 知	合 計
会員数		74	164	93	262	81	188	411	1273
参加者		74	164	48	197	68	178	407	1136
分科会	第１分科会	9	21	6	24	9	22	51	142
	第２分科会	9	21	6	25	8	22	54	145
	第３分科会	9	20	6	25	8	22	44	134
	第４分科会	10	20	6	24	8	23	54	145
	第５分科会	9	21	6	25	9	22	53	145
	第６分科会	9	20	6	24	9	22	45	135
	第７分科会	10	21	6	25	8	21	53	144
	第８分科会	9	20	6	25	9	24	53	146
合　　計		74	164	48	197	68	178	407	1136

(5)　７月６日㈮の日程および全体会について　● 全体会場…名古屋国際会議場　センチュリーホール

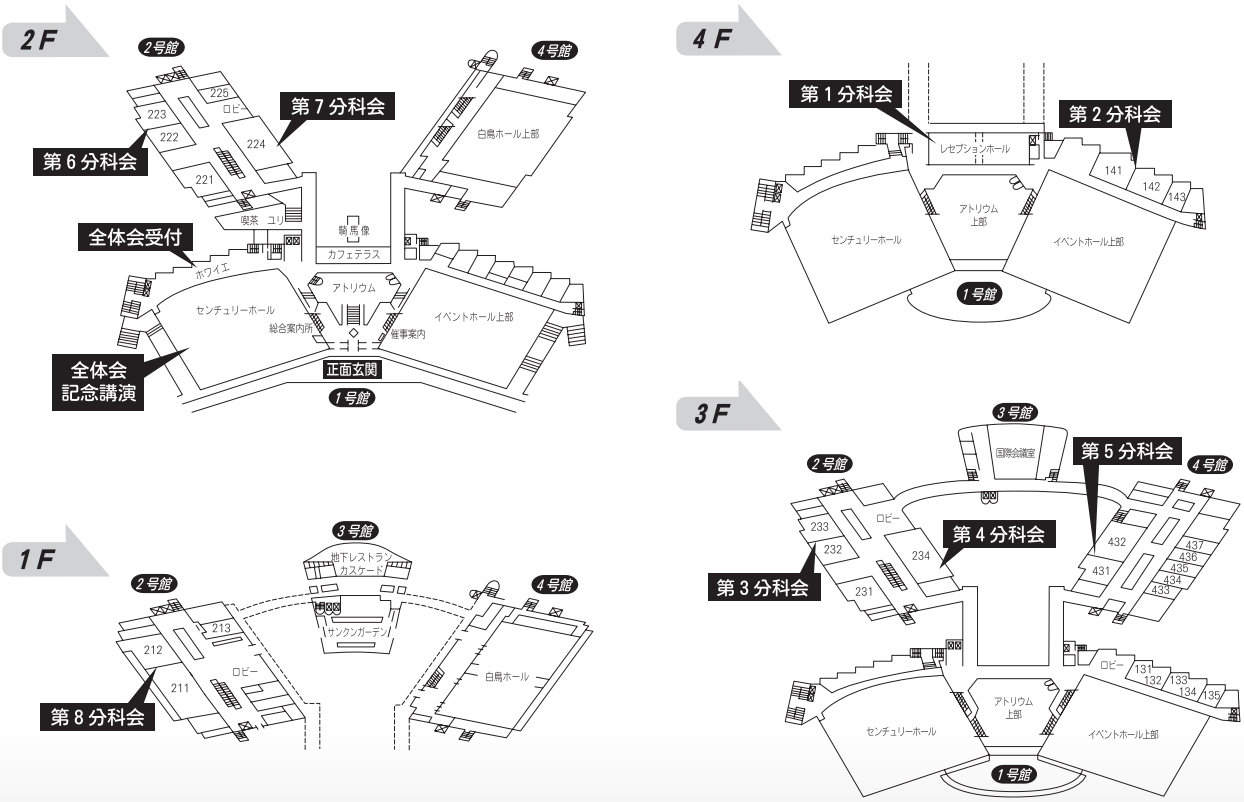
受　　付	全体会Ⅰ	記念講演	全体会Ⅱ
9：00～9：30	9：30～10：30	10：30～12：00	12：00～12：30
センチュリーホール ホワイエ	センチュリーホール ○ 開会式 ・国歌斉唱 ・開会の挨拶 ・来賓祝辞	センチュリーホール ○ 講演会 ・講師　山田満知子氏 ・演題　素直な心が才能を伸ばす！	センチュリーホール ○ 大会宣言・決議文 ○ 閉会式

7　記念講演

演　題　「素直な心が才能を伸ばす！」

講　師　フィギュアスケート　コーチ　山田　満知子　氏

8　会場案内



あいさつ

東海北陸中学校長会
会長　仁　科　正　二

おはようございます。昨日から開催されました、第52回東海北陸中学校長会研究協議会愛知大会に、東海７県から「ものづくり愛知」にご参集いただきまして、研究協議を深めていただきました。本当に光栄に思っております。愛知県小中学校長会も、心から歓迎申し上げます。ありがとうございました。

また、公務ご多用の中、愛知県副知事　片桐正博様をはじめ、多くのご来賓の皆様にご臨席を賜りました。感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

そして、本大会に全日本中学校長会会長　三町章様、併せて、愛知県小中学校長会会長　坂野重法様にもご参加いただいております。感謝申し上げます。

さて、昨年３月の東日本大震災から１年半ほどの時が経過をいたしました。被災地での復興活動は徐々に進みつつありますが、今なお厳しい状況であることには変わりありません。私たち、中学校教育に携わる者は、全日本中学校長会を通じて被災地への支援を継続するとともに、未来を担う子どもたちに確かな学力、そして、豊かな心を育むことが大切であると再認識し、全力で取り組んでいかなければならないと思います。

現在、愛知県小中学校長会では「つながり力を高め、共に行動する校長会」のキャッチフレーズをもとに活動をしております。「つながり力」とは、会員相互はもとよりですが教育委員会や教育関係諸団体との連携、あるいは子どもや家庭、地域とのつながりを一層深めることでありますし、「共に行動する」ということは積極的に情報収集し、共有し、考えを述べながら、社会の信頼を得るために行動するということであります。

東海北陸中学校長会も同様に、全日中教育ビジョン「学校からの教育改革」を指針とし、校長自ら学校経営の責任者として使命感や確固たる教育理念とビジョンを持ち、リーダーシップを強く発揮するとともに、地域住民から支持され、信頼される学校の創造に努めることを目標としております。

本大会は、「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え、社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育」を主題に、研究協議を通して、各県の取り組みを発表する中で校長同士で話し合うことによって交流を深めたいと考え、グループ討議も取り入れさせていただきました。

そして、その成果とさらなる課題を、お互いに共有することによって、我が国の中学校教育の向上に資するとともに、広く国民の信託に応えていかなければならないと思っております。今後も、「つながり力を高め、共に行動する校長会」として活動をしてまいりましょう。

本大会が、ご参加いただいた皆様、そして、各県校長会にとりまして、実りのある研究協議の場になったことを確信しております。来年度、開催予定の福井大会へと引き継いでいただければと思っております。

最後になりましたが、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、全日本中学校長会、並びに関係諸機関の皆様からのご指導・ご支援に対しまして心から感謝するとともに、本大会の開催にあたり、愛知県の実行委員会の皆様にも、感謝を申し上げ、全体会、会長のあいさつとさせていただきます。

本日も、またよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

あいさつ

全日本中学校長会
会長　三　町　　章

ただいまご紹介いただきました全日本中学校長会会長の三町章でございます。本日は、第52回東海北陸中学校長会研究協議会愛知大会が開催されましたことを、心からお慶び申し上げます。東海北陸中学校長会　仁科正二会長はじめ、役員の皆様、関係者の皆様に心から敬意を表しますとともに、ご支援を賜りました愛知県並びに愛知県教育委員会、名古屋市並びに名古屋市教育委員会の皆様、多くの関係の皆様に深く感謝申し上げます。

まず、東日本大震災によって甚大な被害を受けた地域、学校の校長先生への支援についてお話をします。教育の復興に向けた被災地の学校関係者のご苦労と努力は、想像に余りあるものです。全日中としては、教育の復興に懸命に努力されている被災地の校長先生を支えずして、組織としての存在価値はないとの思いで取り組んでおります。

今年度も現状を把握し、全国からお寄せいただいております募金を活用するなどして、行政からでは手の届きにくいところへ適切な支援を継続をしてまいります。是非、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

さて、学習指導要領も全面実施となりました。10年前の今頃は平成10年告示の学習指導要領が全面実施の年でありながら、学力低下への懸念が世の中に大きく渦を巻き、まさに嵐の中での船出といった状態でした。それを思うと、全国の各中学校においては着実な一歩を踏み出したものと受け止めております。

世の中はグローバル化が進展し、知識基盤社会の時代になりました。競争と共存・協力が共に必要とされる大変難しい社会です。このことを考えると、これからの時代を生き抜く子どもたちへ、確かな学力、豊かな心、健やかな体の育成を目指して編成された新しい教育課程の重要性を改めて強く認識し、着実に推進するという責任を感じずにはいられません。まさに、これまでの全国の中学校で研究・実践を積み重ねてきたことの真価が問われる正念場だと言えます。昨日の本研究大会分科会でも、大いに議論されたことだと思います。ここでの議論が、今後の各学校の教育活動や東海北陸校長会、全日中の活動に生かされるものと期待しております。

では、多彩な教育活動を推進するための、教育条件についてはどうでしょうか。中学校学習指導要領の全面実施に合わせた少人数学級の実現や、基本定数の改善がなかった義務教育国庫負担金に代表されるように、十分な状況とはいえません。

このような現状で、特色ある教育活動を展開するための学校環境は十分に確保されるのでしょうか。子どもと向き合い、語り合う時間は確保されるのでしょうか。このままでは人的にも物的にも、

全国各都道府県における格差は広がるばかりです。

また、教育に関する課題解決の方向性に関しても、実例を挙げれば、教員の資質向上策として制度化された「10年経験者研修」、その後の「教員免許更新制」の導入、現在は新たな教員免許状創設の議論といったように、その時その時の政治状況によって、変化している現実もございます。政府が定める「第２期教育振興基本計画」についても、現在、中央教育審議会で審議され、年内に答申される予定です。

「発信する全日中」「行動する全日中」です。中学校教育の振興を図り、国家社会の発展に寄与すべく、主張すべきことは主張してまいります。国に求めるべきものは引き続き要請し、その実現を目指します。

とは言え、学校は生きています。生徒は日々、成長しています。昨今の政治状況や厳しい財政状況の中にあっても、教育の営みを止めたり、緩めたりすることはできません。校長としてやるべきことはやる、全日中としてやるべきことはやる。そうした思いを込めて作成したものが、全日中教育ビジョン「学校からの教育改革」です。

行政主導のいわゆる上からの改革ではなく、教育の実践的専門家にして、学校の最高責任者である校長が、自らの明確な改革ビジョンを持って、積極的に学校から教育改革を図ろうとするものです。

発表して３年が経とうとしています。10の提言の内容について、必要に応じて具体的な見直しを図ってまいります。

特に学校の努力を阻害している要因は何か。そうした視点からも整理し、全日中の活動に生かしてまいります。検証、見直しの作業は行いますが、全日中教育ビジョンの方向性にブレはありません。そして、学校からの教育改革の歩みを止めてもなりません。これからも、「有言実行」の行動理念の下に教育改革を進める全日中として、叡智を結集し、皆さんと一緒に取り組んでいきたいと考えております。

最後になりましたが、この愛知大会が、大きな成果を挙げられることを、そして本日、ご参集の皆様のさらなるご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。

来賓祝辞

次の方々からご祝辞をいただきました。

愛知県教育委員会
委員長　**小　池　高　弘 様**

愛知県副知事（知事　代理）
片　桐　正　博 様

第１分科会

創意工夫を生かした特色ある教育課程の編成・実施

研究の視点
- ○ 知・徳・体の調和のとれた特色ある教育課程の編成・実施
- ○ 学校や地域の特色を生かした教育課程の編成
- ○ 総合的な学習の時間の質的向上

◆口頭発表者　高井　嘉人（三重・光陵中）　鎌仲　徹也（富山・新湊西部中）
◆文書発表者　大石　哲郎（静岡・和田中）　東　久雄（福井・灯明寺中）
日比　修二（岐阜・不破中）　竹本　良成（石川・川北中）
片山　哲郎（愛知・名南中）
◆司　会　者　佐藤　健治（三重・成徳中）　山中　英昭（愛知・治郎丸中）
◆運営委員　原　純夫（愛知・沓掛中）　佐藤　康志（愛知・千代田中）
大澤　義生（愛知・豊浜中）
◆記　録　係　長縄功太郎（愛知・坂下中）　日江井　真（愛知・北陵中）

Ⅰ　提案・協議

第１発表者

高井　嘉人　校長（三重県・光陵中）

【主題】

創意工夫を生かした特色ある教育課程の編成・実施
－小・中学校の円滑な接続を目指す実践から－

１　研究内容

桑名郡市は三重県の最北部にあり名古屋市の通勤圏となっている地域である。桑名市は平成16年の市町村合併により９つの中学校と28の小学校という構成になった。桑名市の地域の特性から、旧桑名市の市街地、旧桑名市の新興住宅地、旧桑名郡という３つの地域に分けられる。ここでは、小中連携の共通した実践的研究と各中学校区の特徴的な取り組みを行った。

⑴　共通する小・中連携の取り組み

ア　中学校区ごとの小中校長会の開催

定期的に中学校区ごとに小中学校長が集まって話し合いを持っている。中学校区ごとに実施している取り組みや行事について計画や進捗状況について確認したり、児童生徒の様子について意見交流をしたり、不審者情報や台風時の対応など危機管理についても共通理解を図り、対応の統一を行っている。

イ　中学校区ごとの小中学校教員研修会

毎年、中学校区の小中学校教員が集まって研修会を開催している。意見交流会を実施したり、授業における学習形態や生活実態を交流したりした。

ウ　人権教育セットアッププラン21の取り組み

桑名市ではあらゆる差別のない「人権の世紀」を築くために、学校やPTAが中心となって、各中学校区ごとに設置されている人権教育推進協議会の中で、地域性を活かした特色ある取り組みを実施している。地域の方々にも参加していただき開催している。

エ　音楽と芸術の集い

平成16年の市町村合併に伴い、各市町村で開催されていた「音楽と芸術の集い」は各中学校区ごとに開催されることとなった。同じ中学校区の小学生と中学生が集い、音楽会や作品展を通して交流活動を進めている。

⑵　特色ある小中連携の取り組み

ア　互いに高め合うことを目指したペア学習、４人グループによる学び合い

光陵中学校区は、すべての小学校で話し合い活動や、話し合いによる学習が同じように実践され、積み上げられてきたことで、中学校入学当初より話し合い活動がスムーズに行われた。４人グループの話し合いによる授業を繰り返すことで、本音や本気で話し合いがなされ、以前に比べ授業に集中できない生徒は極端に減った。

イ　ノーゲームウィークの取り組み

幼小中の連携教育の推進の一環として「基本的な学習及び生活習慣の確立と改善を図るために」をテーマとした。取り組み内容①期間中ゲームなど一切やめる。②テレビも見ない。③できた時間を親子の触れ合いなどに有効活用する。④早寝早起きをする。９割以上の保護者が良かったと答えている。その後も、毎月第３日曜日をノーゲームデーにするなど継続している。

ウ　算数・数学科における一貫した指導方法

正和中学校区の小中学校で子どもたちの算数・数学的な思考力を伸ばすために、「１あたり量を大切にした」授業づくりに取り組んだ。小学校と中学校でシェーマを統一し、ともに「１あたり量」を大切にした指導を続けることで、９年間の指導に一貫性を持たせることになり、成果も上がると考え、現在も実践を続けている。

エ　小学校６年生による中学校見学会

長島中学校区では、新入生の中学校に対する不安を少しでも取り除くため、中学校を知ってもらおうと毎年１回に小・中交流会を行っている。

オ　電子黒板の活用

木曽岬中学校区は、１小学校１中学校で構成されている。町では、学力向上の一助として電子黒板の導入と活用に力を入れている。研究授業を小学校と中学校で１回ずつ実施し、実践交流会も２回開催している。

２　成果と課題について

小中連携の様々な取り組みから、次のような成果が確認できた。

○小１から中３までの子どもたちに関わる教師すべてが、校区の児童生徒の課題を共有し、９年間の育ちや学びを見通し、同じ方向を向いて指導していくことで、確かな力をつけていくことができる。

○小中学校の教員間で連携が進み、日常の教育活動も信頼関係の中で実践ができている。

○中学校区の子どもたちを、多くの人（保護者、地域、学校）の関わりの中で育てていくことができる。

○中学校長会で様々に情報交流することで市内各地区の様子が分かり、学校運営の参考にすることができる。

３　おわりに

今回の発表に関わって、自分の中学校区の実践をまとめる中で、その実践のねらいや成果と課題が改めて確認でき、見直すきっかけとなった。

第２発表者

鎌仲　徹也　校長（富山県・新湊西部中）

【主題】

創意工夫を生かした特色ある教育課程の編成・実施

－平成24年度学習指導要領全面実施に向けて－

１　はじめに

教育課程編成の基本的要因は、教育目標と教育内容及び授業時数である。これらの設定においては、地域や学校の実態及び生徒の心身の発達段階と特性を考慮して編成する必要がある。平成24年度新学習指導要領全面実施は、校長のリーダーシップの下、適切な教育課程を編成し、意図的・計画的な特色ある教育活動を行うチャンスと捉えたい。また、特色ある教育課程とは、他の学校とは違うことや特別なことをするのではなく、学校の教育目標を確かに具現化するための教育活動であると捉える。

本年度は、各学校の重点目標が、校長のリーダーシップの下、どのような意図で設定され、それが、７つの改訂ポイント及び改善事項のどの内容と関連した設定になっているかを調べるとともに、次年度の教育課程編成上の問題点と改善策を探り、研究を進めることにした。

２　研究の内容

⑴　ねらい

平成23年度の重点目標設定の趣旨及び教育課程

編成で意識した内容と新学習指導要領の改善事項との関係を調べることを通して、創意工夫を生かした特色ある教育課程の編成・実施及び、校長としての働きかけについて考察する。また、全面実施に伴う授業時数確保や教員配置等の予想される問題点と解決策を学校規模別に探ることで、次年度の編成に生かす。

⑵　内容

ア　教育目標設定に関して

イ　育てたい生徒像が見える重点目標設定

大規模校では、「思いやり」や「認め合い」「学び合い」等の項目が圧倒的に多く、集団づくりに重点をおいていることがうかがえる。小規模校では、知・徳・体に関する項目を万遍なく設定している。

ウ　学習指導要領７つの改善事項から見た学校の創意を生かした特色ある取り組み

それぞれ７つの改善事項について実践事例を挙げて紹介している。

エ　学校規模別に見る平成24年度の教育課程編成上の問題点と解決策

⑶　小規模校

授業時数増となる教科担任の持ち時間数が増え、教員のゆとりがさらになくなるであろう。一人の教員では物理的に不可能であり、臨任講師などで対応していかなければならないのではないか。

⑷　中規模校

少人数指導やTT指導ができなくなる。時間数の確保では、さらなる行事、分掌の見直しを図る必要を感じている校長もいる。

⑸　大規模校

少人数指導やTT指導の実施が困難になる。正規教員で充足できない。指導力の低下が懸念されている。

３　おわりに

学校経営を行うに当たっては、設定した目標や具体的計画等に照らして、その達成状況や達成に向けた取り組みの適切さを、自己評価や学校関係者評価を参考にしながら、次の目標の設定や計画等に生かしていくことが大切である。今回の調査で次のことが明らかになった。①次年度に向け、改訂ポイント及び改訂事項の内容に関する取り組みは着実に行われている。②言語活動の充実に関しては、各学校の捉え方に温度差があり、共通理解が必要である。③授業時数の変更に伴う人員配置に解決策が見当たらないことは大きな課題である。④少人数の良さや成果が実感されてきており、少人数指導加配教員の配置に向けての要望を継続することが大事である。⑤活力ある職場となるための校長のリーダーシップが更に問われることになるだろう。

Ⅱ　全体協議

愛知県　４人グループでの話し合いによる授業形態について教えてほしい。

三重県　３年前に発表が決まり、地域の生徒のコミュニケーションが不足していることから、先進校へ視察に行った。４人グループでの話し合いを中心に、生徒自らが、学んでいこうという意欲を大切にして、授業を行っている。

岐阜県（文書）　―教育課程の編成・実施における校長の役割―　学校の実態を、「教師力」「組織力」「評価力」の観点から、視点を明確にして見直す必要があるのではないか。校長だけでなく地域を含めて考えていくことが必要と考えた。

静岡県（文書）　―学校や地域の特色を生かした教育課程の編成―　兼務教員による授業交流を行っている。９年間を見通したカリキュラムづくりと個に応じた指導の必要性を再確認した。

石川県（文書）　―新教育課程における「総合的な学習の時間」の在り方―　授業時数が削減される中で、各校の校区にある地域の財産をもう一度見直すことになった。

福井県（文書）　―小中連携による中学校区教育の実践―　小中連携した活動を行った結果、「心を育てる教育」を道徳の授業だけでなく、教科や全教育活動で意識して取り組むようになった。

愛知県（文書）　―言語活動の充実を目指す教育課程の工夫・改善に向けて―　言語活動の充実についての校長の意識や期待を「話し合い活動」の積極的な推進という姿で浮き彫りにすることができ、教育課程の工夫・改善として、社会性や道徳性育成の方向性を見いだすとともに、提言としてまとめることができた。

Ⅲ　グループ協議

１　はじめに

グループ協議では、特に小中連携の取り組みや言語活動の充実について話し合われた。

２　代表グループから

⑴　Ｃグループの報告

小中連携の話題の中で、「ノーゲーム、ノーテレビデー」を夏休み中３日間取り組んだが、祖父母の抵抗に遭い失敗した例と、中学校のテスト週間に小学校の勉強週間を作り、それがノーゲーム、ノーテレビにつながり、保護者の協力を得られたという成功例が報告された。

小中連携は、動くのは教員、仕組むのは校長で、やらされ感をなくしていくことで成果が表れることが確認できた。

小中連携では、生徒の指導において、いかに情報を共有できるかが大切で、生活サポートというシステムを作り、校内委員会に小中の先生が参加して行う取り組みが紹介された。

学力での小中連携は、無理のない方向に進めていくと長続きすることや、教員の資質向上のために、教師自身の聞く・話す力を高めることの重要性も報告された。

言語活動の充実は、各教科できちんと定義をして、視点を明らかにしていくことが大切である。

⑵　Ｆグループの報告

ペア学習や４人グループの学び合いの実践により、学力だけでなく、人間関係づくりに有効であるという報告があった。

小中連携の取り組みで、単独教科の連携から３教科に連携を広げているという報告があった。

また、防災の面で対応のずれがないように小中の連携をしていくという取り組みの報告があった。

学校だよりを小中３校で協力して１枚出しているといった取り組み、小中連携で不登校が少なくなった事例が報告された。

指導要領の全面実施に関わり、選択教科がなくなり、伝統文化の継承を総合的な学習でプロジェクトチームを作って行っているという報告や、読書や清掃の時間を削減して、放課後の活動を確保する努力をしているという報告もあった。

⑶　Ｉグループの報告

小中連携については、市単位で行うと取り組みやすい。コの字型の座席、４人グループの学び合い学習は、聞く姿勢がないと中学校では失敗することがある。小学校から取り組まないと難しい。

特色ある教育課程の編成は、地域の特色もあり、校長のビジョンも大事だが、教育のスタンダードがあって、取り組みが難しい。行政任せにせず、校長会の心構え、組織の有り様、連携の仕方が組織的になれば、地域間格差もなくなると考える。

３　おわりに

教育課程の編成には、校長のビジョンを明確にすることが大切だという意見が多く出された。

Ⅳ　まとめ

１　校長のリーダーシップと創意工夫について

教育課程を編成するに当たり、校長のリーダーシップが重要である。単に職員に号令を掛けることではなく、個々の職員の意志、熱意といった方向性をまとめること、そして明確なビジョンを示した上で、組織力を最大限にすることが、リーダーシップを発揮することになる。

創意工夫についても、一人だけのアイデアではなく、経験豊富なベテラン教師と直接生徒や保護者と対応している若手や中堅教師との積極的な提案や参画があって深まっていく。それが、教師の力量向上になり、さらに組織の力が深まっていくと考える。

２　特色を生かした教育課程について

特色を生かした教育課程とは、「学校の実態・地域の特色を生かす」ということである。

他校と連携することで自校を見直し、次に生かすことができる。視点を明確にして分析すること、教育目標を具現化することが重要である。

第２分科会

確かな学力の定着を図る指導と評価

研究の視点
- ○　基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得と活用、探究を図る指導の工夫・改善
- ○　学ぶ意欲を高める学習と評価の工夫・改善
- ○　家庭との連携を図った学習習慣の確立

◆口頭発表者	升屋　和夫（石川・能登香島中）	大池　健弘（愛知・東部中）
◆文書発表者	金田　知久（静岡・江南中）	小辻　洋三（福井・越前中）
	古川　一男（岐阜・神渕中）	金丸　勝実（三重・鼓ケ浦中）
	竹部　一司（富山・西條中）	
◆司　会　者	西上　純一（石川・山中中）	滝　　誠（愛知・城東中）
◆運営委員	大藪　晃嗣（愛知・布袋中）	原田　法人（愛知・春木中）
	榊原　雅信（愛知・師崎中）	
◆記　録　者	鍵野　英夫（愛知・犬山中）	池田　　博（愛知・松平中）

Ⅰ　提案・協議

第１発表者

升屋　和夫　校長（石川県・能登香島中）

【主題】

確かな学力の定着を図る指導と評価

－評価を生かした授業改善の取り組み－

１　授業改善と評価について

学校評価では客観性を重視する方向性と学校改善を重視する方向性がある。本市校長会では、学校改善を重視する考え方で取り組みを進めている。そのため、評価は網羅的で客観的なものとするのではなく、改善を意図した評価項目が評価されればよいので、評価の項目や内容もそれぞれ学校独自のものとなっている。

本市中学校の共通した学校改善目標は授業改善により確かな学力の育成を図るという点であるので、そのために必要な授業力向上へとつながる評価はいかにあるべきかについて共同研究している。学校評価を生かした学校改善の視点から授業を変えようとする取り組みを推進している。

２　評価を生かした授業改善の取り組み

⑴　学校評価により授業改善を図る取り組み

Ａ校では、学校の方針や重点目標と学校評価項目に整合性がないという点、校務分掌上の各部会の組織としての機能化が不十分であるという点、中小規模の学校で職員が複数部会に所属しており目標や職責の焦点がぼやけてしまっている点などの現状を打開し、目標・取り組み・検証・改善が一体となったPDCAサイクルの確立に取り組んでいる。学校経営のすべての始まりは「学校経営ビジョン」からスタートするということの意識化を重視し、グランドデザインの作成と具体的取り組みの計画、その計画に基づく実践とその検証・改善を一体化し、そのサイクルの確立を目指している。このことにより、組織的に授業改善を図っている。

⑵　学校教育研究会を生かした取り組み

校長会では、教科指導の研修を推進していくシステム作りが必要であると考えている。七尾市には学校教育研究会という組織がある。校長会として、その中の教科別研究会の主たる取り組みを授業研究とすること及び教科別研究会ごとに年間２

セットの指導案検討会・授業研究会を実施することを意思統一している。年度初めの４月に組織づくりと年間計画を立ててスタートする。各教科別研究会の会長は校長が務めており、研修日には市内の教員全員がこの会に出席して研修している。指導案検討会の日は、授業予定者と各校教科担当者が指導案について協議を深める。授業研究会当日は、指導主事を招いて専門的な視点から指導・助言をいただく研修会としている。

３　今後の課題

⑴　学校評価と授業改善について

学校評価を通して、今年度の重点目標とその取り組みの方向性は保護者の願いとも一致しているという確証を得られたことの意義は大きい。しかし、学校の思いや取り組みが保護者や生徒に十分浸透していない状況が浮かび上がり、このことを真摯に受け止め、新たな方策を企画する必要を感じている。

⑵　学校教育研究会について

課題は、各学校それぞれに授業研究の取り組みの視点がある中で、各教科別研究会としての取り組みの検証などPDCAサイクルを生かして授業研究の質を高め改善していくことである。

４　おわりに

本研究を通して改めて考えさせられたことは、当該校の生徒一人一人の学力を学校の指導の結果として真摯に受け止め、組織として授業改善及びこれに確実につながる学校改善を図る校長の学校経営能力や問題解決能力が問われているということである。

第２発表者

大池　健弘　校長（愛知県・東部中）

【主題】

確かな学力の定着を図る指導と評価

－学びの学校づくり－

１　学びの学校づくりについて

犬山市では、平成13年度より「犬山の子は犬山で育てる」という理念の下に校長会、教育委員会が協同して教育改革を進めてきた。人格の完成を目指し、学校を「共生」「協同」の場と位置づけ、子ども同士、子どもと教師との豊かな人間関係を育みすべての子どもの学びを保証することをねらいとしている。そのために、「自ら学ぶ力」を重要な要素と位置づけ豊かな人間性を育むとともに、幅広い学力の形成に努めている。この目指す教育を念頭において、市内小中学校14校が授業改善に取り組んでいる。この「学びの学校づくり」研究推進を図るため、毎年、小学校と中学校それぞれで「授業改善交流会」を開催して、全学級公開授業、分科会を行い、教師の資質・能力の向上を図り、学校の活性化にも努めている。

２　研究実践

⑴　授業改善交流会の取り組み

毎年、「学びの学校づくり」を大テーマとして小学校、中学校それぞれの会場校で公開授業、分科会に分かれて研究協議会を開催している。校長会代表と市内教務主任会を中心に毎年主題を設定。分科会では、市内の教師が一堂に会して、日頃の授業改善の成果をレポートで持ち寄り、共有している。犬山市外からの参加もあり、授業改善の能力を高めるもとになっている。また、小中学校ともに持ち寄った全レポートを資料集として冊子にまとめている。

平成22年度からは、小中連携をより高めるため授業改善交流会を小中が相互に参観できるようにした。そして、小学校から中学校にかけて、学習がどのように生かされるのか、互いに小中の連携の大切さを再確認することになった。

⑵　授業研究会の取り組み

市内14小中学校から希望者を毎年募り授業研究会を自主的に立ち上げ、指導方法の工夫・改善について月１回程度、研究的実践を行っている。交流しながら共に育つことを目標としている。さらに授業研究会で得られた成果を各学校の現職教育に還元し、新たな視点や手法を紹介することで学校全体を活性化させるねらいも合わせもっている。講師には中京大学の杉江修治教授を招き指導を仰いでいる。そこでは、「学び合い、高め合い」を主題に指導方法の工夫・改善について研修を深め、教師としての専門性を高めている。長期休業中にはビデオによる「公開授業研究会」を行い研究協議で授業分析をしながら、学び合いの授業について研究を進めている。

３　おわりに

犬山が教育改革「学びの学校づくり」を進めて10年が過ぎた。【めざす子ども像】【めざす教師像】【めざす学校像】を掲げ、「犬山の子は犬山で育てる」という共通の目標を追い求め続けている。しかし、少人数学級や少人数指導が当たり前のようになってきている今、形ばかりが優先している面もある。子どもたちは、どんどん先を歩み始めている。我々教師も遅れをとらず、子ども同士、子どもと教師の温かなふれあいの中で「学び」が深まるように仕掛け、確かな学力と豊かな人間性を育むように努めなければならない。「学ぶ校長会」として研鑽を積むと共に、「学ぶ教師集団」育成のための「仕掛け」と様々な組織活性化を図りながら今後も模索していきたい。

Ⅱ　全体協議

静岡県（文書）　浜松は、「心の耕し」をキーワードにして「幼児教育の充実」「『小中一貫教育』の推進」「『学ぼう　ふるさとはままつ』の推進」を３つの柱として、各中学校区ごと幼稚園、小学校、中学校が連携して人づくりを進めている。

その中で、確かな学びと育ちのために校区の校長同士が情報交換を行い、連携を取り合っている。情報交換会では、中学校区の基本的な方向性（Ｐ）を明確にし、各校長が自校の取り組み（Ｄ）を振り返り（Ｃ）、目指す子どもの姿の具現化に向けて、担当者への指導助言を通して、よりよい取り組み（Ａ）につなげている。

福井県（文書）　福井県は、採用試験自体が、小中一貫の採用になっている。そのため、小中学校の連携には、もともと力を入れているので、小中学校の両方を経験している教員が多い。そして、全ての小中学校区で連携授業に取り組んでいる。具体的には、小中９年間を見通したリーフレットを作成し、広く周知のために地域へ配布もしている。校区によっては、幼・保・小・中の12年間のリーフレットを作成しているところもある。リーフレットには、９､12年間を見通した学習指導（話す、聞く、書く、学習用具、家庭学習、系統的な地域学習）や、生活指導の具体的な取り組みや目標が一覧表にまとめられている。そして、各校種で実践が行われている。

愛知県　小中連携に関して、犬山市や七尾市では、全教員が授業改善交流会や授業研究会で授業を参観し、交流をするとのことであったが、全部の小学校の教員が中学校へ行くのか、一部なのか。また、中学校から小学校へ行くのはどうなのか。さらに、訪問する側の学校ではその日の授業はどうなるのかを教えていただきたい。

愛知県　中学校の会場に、全部の小学校の教員が行くわけではなく、小学校の高学年の先生方が半分くらい見に行くなどで、特に決まりがあるわけではない。互いの先生が、それぞれの学校での授業を見ることで、小学校での話し合いがどのレベルで行われているかを知ることで、中学校では、その基礎の上での話し合いができるようにしていくなどを目的にして行っている。その日の授業は、公開の会場校以外は午前中授業で下校となる。

石川県　七尾市では、授業を市内の学校全職員が参観する。小学校の先生が中学校の授業を見ることも、中学校の先生が小学校の授業を見ることも可能である。

富山県（文書）　学ぶ意欲を高める学習指導と評価を推進するには、校務を精選し、授業への時間と心のゆとりが教師に生まれるようにすることが欠かせない。同時に、教育活動や部活動とのバランスをとり、生徒の生活にゆとりが生まれるようにすることも必要である。教師、生徒ともに時間と心のゆとりが生み出されるよう教育課程の編成や校務の精選に、これまで以上に配慮していかなければならない。

三重県（文書）　地域ぐるみの教育の推進を、学校運営委員会を中心に進めている。中でも、家庭・地域等との連携による補充学習の推進を行っている。担い手は、各校区のボランティアで、毎週月曜日の６限目や長期休業中の１週間をサポートタイムとして行っている。

岐阜県（文書）　確かな学力の定着を図るため、授業の終末を“学びの自覚”を図る場として、その時間に学習したことが確実に身についたかどうか生徒と教師が自覚できることを意図した実践（本時の学習のまとめ、確認問題の実施、確認問題の確認）を進めている。

Ⅲ　グループ協議

１　はじめに

第２分科会グループ協議は、１号館の141・142会議室において、参加者145名（福井県９名・三重県21名・石川県６名・静岡県25名・富山県６名・岐阜県22名・愛知県56名）が12グループ（Ａ～Ｌ）の小集団に分かれて、質疑応答や話し合いを行った。

２　代表グループから

⑴　Ｃグループ

確かな学力定着を図るには、幼小中の教師交流研修会、生徒の学習時間と学習内容の充実を図る工夫や確認テストによる評価の在り方、効果的な少人数指導や習熟度別授業、放課後・土曜日・夏季休業の活用方法等について話し合った。

校長の経営ビジョンに基づく教職員の活動状況を把握し改善しながら、学力形成に欠かせない生徒指導や授業規律を確立することで、学び続ける生徒を育成することが大切である。

⑵　Ｆグループ

確かな学力の定着を図るには、教師力の向上、授業改善、小中高の連携が重要である。教員の二極化に伴い、若手を鍛えベテランに覇気を促す意味でも、リーダーやエキスパートの育成が必要である。授業公開・授業研究の充実、電子黒板の活用等による授業改善や小中高の緊密な連携によって、学びの共同体という意識を育み、子どもの成長段階に応じて確かな学力の定着を図ることが大切である。

⑶　Ｉグループ

各学校の問題点は、学力の保障をどのように確保し、若手で経験不足の教員をどう育てるかである。また、増加傾向にある外国籍や発達障害の児童・生徒への対応をどのようにするかという視点で話し合った。臨時職員やボランティアを活用したコミュニティスクール（三重県）の事例から、多くの人材を確保し、学校の要望に応じて人的な加配が可能になる環境づくりの必要性を確認した。

小中の交流で授業改善をするとともに学習規律の確立や評価を指導法に活用していくという視点で、生徒を育てることが大切である。

３　おわりに

各グループでは、自己紹介の後に50分間のグループ協議を行った。

どのグループも基礎的・基本的な知識・技能の習得や活用、探究活動を取り入れた指導の改善・工夫、学ぶ意欲を高める学習と評価の工夫、幼小中高との連携を図った授業改善や習慣の確立等、幅広い視点で意見が交換され、テーマに迫った。

Ⅳ　まとめ

１　学力について

学力については、幅広い人間性から捉え、人格形成の一側面として位置付けることが大切である。

２　学習意欲について

授業づくりの改善・工夫が必要で、日々の全ての教科や領域の学習に組み込むことが重要で、校長は一人一人の教員の授業づくりの能力を高める仕組みづくりを確立することが大切である。

３　評価と指導について

評価を指導の出発点として捉え、個々の子どもの指導に生かすことが重要で、校長は教師個々の意識化を図り、学校全体として評価（PDCA等）を生かした授業づくりのための仕掛けづくりを確立することが大切である。

４　学習習慣について

家庭との協力や連携が不可欠である。自主学習ノートや家庭学習リーフレット等を参考に、今後もより効果的な方法を探究する必要がある。

５　全体を通して

校長のリーダーシップとは、人的配置の働きかけや校内の現状をしっかりと把握し、よさを伸ばし、問題を改善するための仕組みを率先してつくり上げることである。

第３分科会

社会性や豊かな心を育む道徳教育の充実

研究の視点
○　人間としての在り方・生き方を考える道徳の時間の充実
○　道徳教育推進教師を中心とする協力体制の推進
○　家庭や地域と連携を深める道徳教育の充実

◆口頭発表者	芹澤　照平（静岡・高根中）	伊藤　克己（愛知・東星中）
◆文書発表者	吉田　淳夫（福井・上中中）	長瀬　真人（岐阜・荘川中）
	梅本　俊成（三重・南　中）	河上　昌俊（富山・十三中）
	江ノ上伸二（石川・大谷中）	
◆司　会　者	照井久美子（静岡・須山中）	山北　裕二（愛知・八幡中）
◆運営委員	吉川　徳康（愛知・西成東部中）	土田　謙二（愛知・日進中）
	堀田　正敏（愛知・篠島中）	
◆記　録　者	高橋　　篤（愛知・成岩中）	古屋　　桂（愛知・神の倉中）

Ⅰ　提案・協議

第１発表者

芹澤　照平　校長（静岡県・高根中）

【主題】

社会性や豊かな心を育む道徳教育の充実
－地域との連携を通して、
道徳的な実践を育む道徳教育の展開－

１　研究内容

御殿場市の高根中学校では、校訓「守徳」（しゅとく）を「自分のよさ（徳）に気付き、自信をもって発信し、周囲をよりよい状態に変えていく」と読み解き、道徳教育の充実を目指している。これには、保守的で受け身的な姿勢の生徒を変えたいという思いが込められている。

２　実践例等

⑴　読み物資料を使った道徳の時間の充実

学級担任の平均年齢が28.9歳と教職経験も浅いので、読み物資料を使ったオーソドックスな道徳の授業を習慣化するようにした。

①　実践（校長として）

ア　学年（学級）経営案を書くことで、経営における道徳教育の位置付けを意識させる。

イ　静岡県中学校道徳副読本を使用した授業を実践し、「心のノート」の活用を意識させる。

ウ　ワークシートを作成し、実践記録として残すとともに、子どもの思いに対して学級担任としてコメントさせる。

エ　小中連携の観点から、授業の可視化を意識した取り組みを行わせる。（ハンドサインなど）

②　成果

道徳の授業に対する学級担任の苦手意識は、着実に払拭されている。

また、子どもたちは抵抗感なく、登場人物の心情を双方向に語り合うことができるようになってきている。

⑵　外部資源を活用した体験活動の充実

①　実践（校長として）

ア　全校を挙げての演劇活動（表現）

１・２年生は、地域との関わりの深い偉人を主人公にした劇づくりを、本物志向で取り組む。

イ　第二部活動

通常の部活動とは別に、第二部活動として太鼓

部と剣舞部が活動しており、その成果を地区の行事で披露している。

ウ　異年齢交流の場

地域組織が計画する保育園児を対象とした自然体験活動に、小学生とともに中学生をボランティアとして参加させている。

エ　教育講演会

教育講演会の講師として、地域に住む方々を積極的に招聘している。

オ　異文化理解

海外経験豊かな方を特別非常勤講師として招き、英会話をサポートしていただくだけでなく、アメリカン・クッキングなどの活動を取り入れ、異文化理解を深める場としている。

②　成果

質の高い体験活動の場を増やしていくことで、特に、郷土愛や自然愛護、公正・公平、社会連帯への自覚などで、子どもたちの変容が見られる。また、体験活動を重視する学校の経営方針に対して、保護者や地域は好意的な目を向けており、学校評価でも高い評価を受け、子どもたちの地域貢献への意識も高くなっている。

３　今後の課題

地域の手厚い支援は、道徳的な実践を育むことに大きくプラスしているが、それを当然のことと受け止めている生徒の意識は改善の必要がある。また、地域とのつながりの場は多いが、多くは地域が用意した場であり、受け身の活動も多い。

４　おわりに

高根中学校は、校訓そのものが道徳的な実践を求めたものとなっており、学校の教育活動全体が、社会性や豊かな心を育むことを目的とした場となっている。校長としては、機会あるごとに「３つの幸せ」（してもらう幸せ、できる幸せ、してあげる幸せ）に絡めた話をすることで、校訓「守徳」をどう読み解くかを考えさせている。

第２発表者

伊藤　克己　校長（愛知県・東星中）

【主題】

社会性や豊かな心を育む道徳教育の充実

－道徳教育の要となる道徳の時間の工夫と改善－

１　研究内容

名古屋市内の中学校21校（市内の約1/5）を抽出し、道徳の時間の工夫と改善についての現状や校長としての考えを、「平成15年道徳教育推進状況調査（文科省）」の調査項目を参考に調査し、その結果を分析、考察する。また、抽出校の中から、実践の一部を紹介する。

⑴　道徳の時間への校長の思い

①　教師に求めること

道徳教育の目標や道徳の時間の位置付けなど、基本的なことを理解し、生徒の実態を把握し、実態に合った魅力ある教材による授業が進められることを、校長は望んでいる。

②　重点を置いて指導したいこと

特に重点を置き指導したい内容は、「人間愛・思いやり」「生命の尊重」「望ましい生活習慣、節度」「公徳心、社会連帯」などで、この傾向は市民対象のアンケート結果と似ている。

③　道徳教育を進める上での課題

「教師の指導力向上」や「道徳の時間の位置付けの理解」などがあった。

⑵　道徳の時間の工夫と改善に向けて

①　指導を進める上での配慮事項

生徒の実態を常に考えながら授業を進め、他の教育活動との関連性を考慮しながら進めていく必要があると考えている。

②　教材及び授業形態

「心のノート」及び、愛知県教育振興会作成の道徳副読本「明るい人生」以外に使用している教材については、「映像コンテンツ」「自作の読み物資料」「新聞記事」など、多岐にわたっている。

また、学級担任が各教室で行う道徳の授業以外の授業形態では、全校集会での一斉道徳、学年集会での一斉道徳などがあった。

③　外部の人材活用

多くの学校が、外部の人材を活用して、道徳の授業を進めていることが分かった。

２　実践例

⑴　Ａ校　教師の授業力向上と一斉公開授業

①　授業力向上に向けて

現職教育の時間に、代表教師による道徳の模擬授業を行った。その後、授業内容についての研究

協議にファシリテーションの技法を取り入れ、各自の話し合い活動の技術の習得にも役立てた。

また、名古屋市教育センターより講師を招き、道徳の授業の立案、話し合い活動の進め方、題材の提示方法について学ぶ機会とした。

② 道徳の全校一斉公開授業

学校公開日を利用して、保護者への道徳の公開授業を学級ごとに実施した。それぞれの学級でグループ活動に教師自身が学んだファシリテーションの技法を取り入れ、実践を行った。

⑵ Ｂ校　外部講師による学年一斉道徳

「いのちと性を考える」というテーマでの講演及び体験学習を、保健所・民間団体の方々に外部講師として依頼した。

学年全体で講演会を行った後、グループに分かれて体験学習を実施した。

⑶ Ｃ校　様々な形態による全校一斉道徳

全校一斉道徳において、校長を含め様々な担当教諭等で授業を行った。そして教室に戻った後、学級担任の指導の下、各自の考えや感想をプリントにまとめ、振り返りをさせた。

後日、学校便りや学級通信で他の生徒の考えや感想を紹介したり、学級担任がその後の学級活動に生かしたりした。

３　今後の課題

今年度の研究で、「教師の指導力向上」と「道徳の時間の位置付け」などの課題が浮かび上がった。

４　おわりに

道徳教育の要と位置付けられている道徳の時間に着目して調査を行った結果、校長として、他校の様々な取り組みを、いかに情報収集して道徳の時間に生かしていくことができるかということが、道徳の時間の充実につながってくると考えられる。そして、校内において職員研修を行ったり、授業形態を工夫したりするなどの働きかけを行っていく必要があると考える。

Ⅱ　全体協議

福井県（文書）「自立の精神をもち、自主的に考え、誠実に実行できる生徒の育成について」という主題で研究している。人間としての在り方・生き方を考える道徳の時間の充実とともに、家庭や地域との連携、地域の人材活用を課題として進めてきた。こうした取り組みを通して集団のために自分を生かそうとする生徒を増やしていきたい。

校長は、ビジョンと戦略を明確に示して道徳教育の充実に努めていかなければならない。

岐阜県（文書）　道徳を学校の教育活動全体を通じて行うこと、道徳教育推進教師を中心とした指導体制の充実のために校長のなすべきこととその方途を一層明らかにする必要がある。「校長の指導性」という視点で、「学校の経営方針と道徳教育の関連の明確化」「全教育活動を通じた道徳教育推進体制づくり」「家庭・地域と連携した取り組み」の３つの実践を紹介している。

三重県（文書）「道徳教育推進教師を中心にした指導体制の充実」「道徳的価値の自覚を体験活動を通してどのように高めるか」「魅力的な教材の開発」「表現活動を充実し、他者の考えに触れながら自分の考えを深め、成長を実感できる工夫」を中心に研究を進めている。校長としては、様々な仕掛けをするのが役割であり、身近にいる人をどのように活用するかということを考えていきたい。

富山県（文書）　要としての道徳の時間の充実を目指して研究している。地区の全中学校の校長にアンケート調査を行い、その結果を考察したものをまとめた。研究を進める中で、若い学級担任は道徳の授業をすることに苦手意識をもっていることが多いこと、研究推進校などでの研修を積むことが必要であること、校長として、道徳教育推進教師に対する期待や役割の与え方が不十分であることなどが課題として考えられた。

石川県（文書）　市内４中学校はすべて小規模校であるが、地域の人たちは中学生に期待するところが大きく、学校に対して協力的である。この強みを生かすために「家庭や地域と連携を深める道徳教育の充実」という主題で研究を進めている。校長が明確なビジョンを示し、組織的な教育活動を進めていくことが大切である。友達との関わりや体験活動、ふるさとの豊かな自然、地域の教育力を取り入れ、道徳的実践力を高める教育を進めている。

Ⅲ　グループ協議

１　はじめに

若い教師が増えている中で、「社会性や豊かな心を育む道徳教育の充実」のために、校長としてどのようにその指導力を発揮していくかについてグループ協議を行った。

２　代表グループから

⑴　Ｃグループ

校長として、自分の背中を見せる。全校集会で講話し、新聞記事などの切り抜きを生徒一人一人に渡して感想を書かせる。その感想について、校長としてのコメントを生徒に返す。

人間関係づくりに課題をもった生徒が多い。市の研修会に、担当者が声を掛けて全員で参加した。教員の意識の向上、共通理解を図る上で効果があった。

年に１回、学年で同一の資料と指導案を用い、授業公開をしている。研究主任、道徳教育推進教師が企画・立案して、外部講師を招聘した校内研修を行っている。授業を見合ったり実践を報告し合ったりして指導すれば子どもは育つ。道徳の時間の大切さを実感できる。

⑵　Ｆグループ

規範意識を高めるためにも、道徳教育の充実は必要不可欠である。そのためには、県や市町村が中心となって、道徳教育の充実に向けて取り組んでいく必要がある。

校長として、地域、PTAやそのOBとの連携を図り、情報交換等を通して生徒の実態を把握し、学校教育に生かす。ときには、校長が地域に出向いて学校の情報を共有することもある。

人間性を育む出会い学習をベースにする中で、外国人が多くなっている今日、道徳の授業では、グループ活動を取り入れ、全員が気軽に発言できるような雰囲気をつくることが大事である。

校長が率先して、各学年１回道徳授業を行っている。また、校長の掲示板という題で、教職員に校長の思いを伝え、その思いが生徒の心の教育につながるような投げかけを行っている。

⑶　Ｉグループ

若い教師が増えている中で、若い先生の指導力の育成が最重要課題である。そこで、市教委が発足させた、OB教員による講座を開設している。道徳講座、学級経営講座、小学校英会話講座などがある。

学校と地域との連携が活発にできると生徒の規範意識は高まる。地域の教育力を高める中で、バラ園の育成を通して、地域の講師を活用し、豊かな心を育てる道徳教育に位置付けている。

３　おわりに

規範意識を高めるためにも、道徳教育の充実は必要不可欠である。そのためには、県や市町村が中心となって、道徳教育の充実に向けて取り組んで行く必要があると考える。

Ⅳ　まとめ

１　若い教師が増えている

若い教師は経験が乏しい。現職教育等で道徳の模擬授業を行い、互いに授業力を高める。また、道徳教育推進教師を中心として、魅力的な教材開発に取り組み、学校体制・学年体制で授業実践を積み重ねる。

２　外部の人材を有効に活用する

地域の人材や経験豊かなOBを活用して、研修を重ね、地域の特性を生かした体験活動と関連させた道徳授業を実践する。

３　校長として

校長がリーダーシップを発揮し、全校集会で学校道徳に取り組み、自分の思いを教職員や全校生徒に伝え、豊かな心を育む一助とする。

校長がコーディネーターとなり、地域に根ざした学校のために地域人材を活用したり、道徳教育先進校の実践を道徳教育推進教師や教職員に伝えたりして、道徳教育推進のために積極的に関わっていく。

第４分科会

健やかな体の育成を図る教育の充実

研究の視点
○　体力の向上を図る体育・スポーツ活動の充実
○　家庭や地域、関係機関等と連携を図った心と体を育む食育の充実
○　安全に関する指導の充実

◆口頭発表者	柴田　伸昭（岐阜・岐北中）	山田　正幸（福井・和泉中）
◆文書発表者	杉村　　聡（静岡・北　中）	川合陽一郎（三重・東観中）
	塚島　義治（富山・牧野中）	出雲　明子（石川・長田中）
	久保　真樹（愛知・南陽中）	
◆司　会　者	河口洋二郎（岐阜・長森中）	片山　義文（愛知・乙川中）
◆運営委員	上元　謙二（愛知・阿久比中）	久保田　力（愛知・日進西中）
	澤田　豊喜（愛知・平和中）	
◆記　録　者	権田　　昭（愛知・青山中）	稲吉　　治（愛知・岩津中）

Ⅰ　提案・協議

第１発表者

柴田　伸昭　校長（岐阜県・岐北中）

【主題】

健やかな体の育成を図る教育の充実
－校長が意図的に関わり、
実践を充実させるために－

１　はじめに

健やかな体は、学習指導要領の「たくましく生きる力の育成」にとって、根本的な要素であり、生きる源そのものである。「知・徳・体」のバランスのとれた生徒を育成していくには、「体」そのものがしっかり育っていることが大切である。

そこで、健やかな体の育成を図る教育の充実が必要となってくる。そのために、次の２点から、研究を進めた。

⑴　食育を通して、健やかな体の育成を図る意識を育てる

生徒を取り巻く食生活が大きく変容している中、生活習慣病、食物アレルギー、肥満傾向などの問題が起きている。

生徒に「食」に関する知識を与えるだけでなく、生涯にわたって自分の健康を考えて、望ましい食生活を送ることのできる実践的な態度を育成する必要がある。

⑵　性教育を通して、自分の健康の促進を図る意識を育てる

若者を取り巻く社会の変化の中で、性の逸脱行為や望まない妊娠、性感染症の低年齢化などの問題が起きている。そうした中だからこそ、生命の大切さを理解させ、人間尊重、男女平等の精神などを身に付けさせる上で性教育を充実させる必要がある。

２　研究実践

⑴　食育に関わる取り組み

市の栄養教諭及び栄養職員部会が中心となって、「食」に関する生徒の意識調査を行い、実態を把握した結果、次の２つの課題が明らかになった。

・年齢が上がるにつれて保護者の管理や指示が減り、自分の嗜好を優先する傾向が強い。
・食についての知識や実践力があり、自らの健康を考えて食生活を送っている生徒は、積極的に

食事の手伝いを行っており、食に関する生活技術も高い。

この結果を踏まえ、「弁当の日」と給食試食会の実践に取り組むこととした。

＜「弁当の日」の取り組み＞

①職員会でのPTA役員の提案

②弁当の日に関する親子講演会の実施

③弁当の日は楽しく会食

④生徒の感想・保護者の意見の広報

＜給食試食会の取り組み＞

①PTAが保護者への参加募集を行う。

②学校の給食時間帯に生徒と同じメニュー・同じ分量にて試食を行う。

③試食会後、栄養教諭が講話を行う。

④保護者はアンケートに答えるとともに、参加者どうしで交流をする。

⑵　性教育に関わる取り組み

ア　養護教諭部会との交流を生かした自校の性教育の取り組み

学校現場では、性に関して様々な問題が発生していることを踏まえ、校長として、養護教諭部会との交流を深め、校内の学校保健安全委員会を主導し、組織的な取り組みの重要性を浸透させた。

イ　岐阜市教育委員会とタイアップした性教育の取り組み

医師会と岐阜市教育委員会と学校の三者が連携を図りながら、実践に取り組んだ。

岐阜市内の23校全ての中学校では、自校の性教育の指導計画に基づいて、産婦人科医と連絡調整を図って性教育に取り組んだ。

３　成果と課題

・校長としての意図的な関わりが、生徒の発達段階を踏まえた取り組みや指導実践につながり、確かな手ごたえを感じている。

・行政機関や医師会との連携を通して、互いの意思疎通が図られ、より深く、より専門的に指導が展開できるようになった。

・小中一貫教育を意識しながら、指導計画の改善や内容の見直しを図ることが大切である。また、指導の方向性を見出していく必要もある。

・職員の指導力を向上させるために、一人一人へ意図的な働きかけを今後もしていく必要がある。

第２発表者

山田　正幸　校長（福井県・和泉中）

【主題】

健やかな体の育成を図る教育の充実

－スクールプランの位置づけの中で－

１　はじめに

和泉小学校、和泉中学校の所在地、福井県大野市では平成21年３月に大野市の教育理念「明倫の心を重んじ育てよう　大野人」が制定された。

この教育理念の具現化に向けて、本校では、学びあいプラン、みがきあいプラン、ふれあいプランの「あいプラン」をスクールプラン（学校経営方針）に位置づけ、学びあいプランを知育、みがきあいプランを徳育・体育とし、ふれあいプランで地域に根ざした学校を目指し、知・徳・体のバランスの取れた学校教育を積極的に推進してきた。

２　研究の内容

⑴　平成23年度スクールプラン

ア　学びあいプラン

【重点目標】

①学習の基礎・基本の定着を図る。

②思考力の育成を図る。

③コミュニケーション力を高める。

イ　みがきあいプラン

【重点目標】

①「１・８・１」や「２・７・１」の基本的な生活リズムを定着させる。

②他者との関わりの中で、豊かな人間関係を育てる。

③体力の向上に努め、自分の身は自分で守る態度を育成する。

④不登校の未然防止に努める。

ウ　ふれあいプラン

【重点目標】

①たよりや学校公開等で、保護者や地域の理解を図る。

②地域の人材・素材の活用や、地域行事等への参加で、ふるさとを愛する心を育てる。

③保護者や地域・学校協議会の意見や学校評価を学校経営に生かす。

⑵　みがきあいプランの実践から

ア　小学校の実践から

①教科体育

○毎授業時に、体力向上に向けての運動を実施（４分間走、グーパー体操　等）

○中学校と合同マラソン大会や運動会

○スキー学習を実施

②特別活動

○毎週木曜日の朝の活動で体力づくり

○毎週火曜日と木曜日、児童会の企画で昼休みに校庭や体育館で全校遊びの実施

③その他

○オープンスペースに遊具を設置

イ　中学校の実践から

①教科体育

○授業の最初に「グーパー体操」や腕立て伏せなどの筋力トレーニングの実施

○個人学習カード

②特別活動

○「和泉合同運動会」のマスゲーム種目

③運動部活動

○地区中学校体育連盟の「地区陸上大会」と「地区駅伝大会」への全員参加

○冬期間は、全員がスキー部（アルペン・クロスカントリー）へ所属

④総合的な学習の時間・その他

○週２回部活動前に「KT（基礎体力向上）タイム」の実施

３　成果と課題

小学校は、教室のオープンスペースに鉄棒マットを置くことで、いつでも運動できる環境を整えた結果、確実に体力が向上した。

中学校においては、運動部活動への全員参加やKT（基礎体力向上）タイムでの体力づくりを継続してきたことで、男子の体力テストの記録では県平均を上回っている種目が多くなった。

しかし、課題としては食生活の偏りにより、肥満傾向の児童もおり、運動がとても辛いようである。家庭との連携を図りながら、バランスの良い体づくりのために、食生活指導にも取り組まなければならない。

Ⅱ　全体協議

福井県　学校経営の柱を、校長の考えで増やしたのか、職員の意見か。

福井県　大野市の教育理念を具現化する上で必要だと考えて、校長として決断した。

三重県　小中学校の職員の交流があるのか。

福井県　相互交流し、授業を実施している。

愛知県　①岐阜県の昼食の実態②養護教諭部会の実態③校長が考えて行うことはすべて意図的と言えるのではないか。

福井県　「弁当の日」を実施する上での苦労があれば教えてほしい。

岐阜県　①岐阜市は自校方式の学校給食。「弁当の日」は、給食をカットして実施。全員の生徒が持って来られない場合もあるし、実施のねらいを理解してもらうのに苦労する保護者もいる。②市内の養護教諭が集まって研修を深めている。③校長が意図をもって職員と関わっても、うまくいく場面とそうでない場面があるのが実態で、苦慮している。

静岡県（文書）　市内全小中学校が取り組んだ給食残量を減らす取り組みを紹介。給食残量を減らすことを出発点として、健康な体づくりへの継続的な食育や健康教育へと広げていくことが大切である。

三重県（文書）　津市における食育や健康教育・安全教育の取り組みを紹介。食育を展開する上で、栄養教諭が果たす役割がとても大切である。

富山県（文書）　自校で取り組んだ喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育を紹介。防止を訴えかけるだけでなく、自己表現能力を伸ばすこと、実際にそれを伸ばす練習が大切である。

石川県（文書）　金沢市内の体力向上の取り組みを紹介。生徒の実態を十分に把握し、改善すべき点を明確にして一つ一つ確かな実践を積み上げることが大切である。

愛知県（文書）　心と体を育む食育の実践を紹介。保護者への啓発、家庭との連携、外部人材の活用、生徒・保護者向けの講演会の開催などの方策に効果がある。

Ⅲ　グループ協議

1　はじめに

「健やかな体の育成を図る教育の充実」をテーマに岐阜県と福井県の先生には口頭発表、他県の先生には文書発表をもとに前半の全体協議に参加していただいた。前半の内容を受けて、各校の実情に合わせて協議を深めた。

2　代表グループから

⑴　Ｃグループ

「体力・食育・安全」という柱で各県の情報交換をした。

○トレーニングスキルを小中連携で進め、体力テストの平均値が高くなった。転んでけがをする状況が激減した。また、登下校にかかる距離や時間も体力づくりに貢献することが大きい。

○県市町により給食の状況は違っている。名古屋市のスクールランチが１食280円で市からの補助が420円には驚いた。給食を通しての食育は、栄養教諭や保護者との連携が必要である。

○性教育・薬物乱用防止教育では薬剤師会や警察などの関係機関と連携を図り、計画的に進めた。

⑵　Ｆグループ

「給食・安全・体力」ついて情報交換を進めた。

○給食が食べられる学校は活力のある学校と言われる。食べられない生徒の指導は、保護者との連携が必要であり、給食を食べさせる目的を明確にする必要がある。

○栄養バランスを保証する必要があるが、保護者を巻き込んでの全市的な「弁当の日」の実践は大変参考となった。

○体力向上に向けて、部活動の活性化とラジオ体操の推進を市のプランとして小中で進めた。

⑶　Ｉグループ

「体力づくり・食育・防災」について情報交換を進めた。

○部活動が体力向上に寄与している。災害時に逃げ切れる体力になっているかも体力の指標としていきたい。

○性教育に関わるネット上の情報や携帯電話でのやり取りも問題点として視野に入れていく必要がある。

○命、防災、学校生活、社会生活など「健やかな体」に迫る視点は様々ある。実態を正確に把握してアプローチを進めたい。

3　おわりに

短時間ではあったが、他地区との熱心な情報交換を通して、自校を振り返り、次への課題が見えてきたように思う。できるところから実践に移していきたい。

Ⅳ　まとめ

1　アプローチについて

健やかな体の育成を柱にすると、「食育・体力づくり・安全教育・薬物乱用教育・飲酒喫煙防止教育・サーバー犯罪対策」など、いろいろな面からの指導が考えられる。自校の実態を明確に把握し、効果的なアプローチを進めていかなければならない。

2　口頭発表、文書発表について

口頭発表や文書発表では、小中との連携やPTA、医師会、薬剤師会との連携など、他機関との連携が進められていた。地域の特質に合わせた連携を今後も継続し、拡大していきたい。

3　全体を通して

様々なアプローチの中で「よし、これをやっていこう」との決断が、職員にうまく伝わらないことがある。目標や目的を示して「やらされる」から「やりましょう」と質を高める必要がある。「何のためにするのか、なぜするのか」を示すと同時に、ベテランと若手を織り交ぜ、目標が達成できるような校内外の組織も発足させることが重要である。「健やかな体の育成」に向け、校長の意図的な働きかけを常に進める必要がある。

第５分科会

自らの生き方を考え主体的に進路を選択する指導の充実

研究の視点
- ○　教育活動全体を通した計画的、組織的な進路指導の充実
- ○　ガイダンスの機能を生かした進路指導の充実
- ○　勤労観、職業観を身に付け自立を促すキャリア教育の充実

◆口頭発表者　濱谷　一男（富山・岩瀬中）　森下　龍美（三重・赤羽中）
◆文書発表者　鈴木　珠美（静岡・長井崎中）　北川　博規（福井・粟野中）
河野　和彦（岐阜・穂積北中）　禾几　文明（石川・鶴来中）
金田　哲司（愛知・豊根中）
◆司　会　者　谷川　真（富山・早月中）　加藤　弘文（愛知・設楽中）
◆運営委員　内田　幹男（愛知・富貴中）　古賀　直人（愛知・西部中）
千賀　輝男（愛知・甚目寺南中）
◆記　録　者　鵜飼　渉（愛知・葉栗中）　加藤　清彦（愛知・一色中）

Ⅰ　提案・協議

第１発表者

濱谷　一男　校長（富山県・岩瀬中）

【主題】

自らの生き方を考え
主体的に進路を選択する指導の充実
－キャリア教育を踏まえた進路選択の在り方－

１　ねらいと方法

生徒の実態を踏まえ、各学校がキャリア教育をどのように捉え、どのように進めればよいのか、キャリア発達の視点から進路指導に関する実践例を集め、その考察を通して、今後の学校におけるキャリア教育の在り方及び、その際のリーダーシップの在り方について研究を進めた。

２　研究の内容

⑴　キャリア教育の視点を取り入れた学校経営

【Ａ中学校の取り組み】

キャリア教育に関して、人間力と社会感度（社会の状況を感じ取る力）に焦点化して全体計画（学年ごとの目標、４領域８能力をどこで育てていくか）を作成し、その方向を明確にした。計画表により指導するねらいが明確になり、具体的な題材が記載されていることで取り組みやすくなった。

【Ｂ中学校の取り組み】

ア　多方面との連携

自己の進路をたくましく切り拓いていく生徒を育成するためには、キャリア教育の理念を生かした教育活動を推進する必要があると考え、平成19年度から大学、PTA、地域等と連携を図り、人的な支援を得た上で実践をした。

１年生では、「13歳の学び」事業を実施。仕事に対する心構え、業務内容、簡単な実技等を学ぶ。

２年生では、県内の全中学校でも実施する「14歳の挑戦」を行う。職場体験を通し、仕事へのやりがいや実社会における厳しさの一端を体感するとともに、地域社会の潜在的な教育力の再発掘をも図る。

３年生では、「15歳の選択」事業という取り組みを行う。受験や就職活動、さらに様々な体験活動を経てきた大学生・院生から中学生時代の体験等を聞くことで、間近に控えた高校受験、ひいては20歳代前半をも視野に入れた進路選択に向けての一助とするものである。

イ　キャリア教育の視点を取り入れた道徳教育

体験活動を行う前に道徳の時間を通して、活動意欲や学びの態度の育成、勤労の意義等を深めた。また、事後においては、望ましい勤労観・職業観、地域社会に対する感謝の念、理想の実現に向けた実践意欲等を育成することをねらいとした道徳教育プログラムを作成し、見直しを図った。

ウ　全体計画・横断的年間指導計画の作成

学習の時期やねらい、関連教科の題材名を一覧にし、横断的な取り組みを行うことで、教科・領域間における相乗効果を期するとともに、各教科等との関連内容を３年間で見通すことができる全体計画・年間指導計画を作成した。

【Ｃ中学校の取り組み】

３年間を見通したキャリア形成を図るためには、３年間の学習の累積が重要であると考え、入学と同時に生徒一人一人に「キャリアカルテ」を持たせることとした。カルテは、生徒自らが記載し、自らのキャリア発達に取り組んだ軌跡となるよう編集した。

⑵　幼保・小・中・高の連携

【Ｄ中学校の取り組み】

中学生が、幼児から高校生までの幅広い世代と共に活動することで、自らの過去と未来について思いを馳せることがキャリア発達の視点からも有効であると考え、地域の幼稚園・保育所、小学校、高等学校と交流する場を設定している。

⑶　キャリア・カウンセリングの充実

【Ｆ中学校の取り組み】

カウンセリング指導員、スクールカウンセラー、心のサポーター等の教育相談部が学級担任に協力し、生徒の生き方や進路に関する悩みなどを受け止め、自己の可能性や適性について自覚を深めたり、適切な情報を提供したりしながら、生徒が自らの意志と責任で進路を選択できるように教育相談体制を整えた。

⑷　地域人材の活用

地域の方を講師として招き、中学生に講話をしていただくことは、キャリア教育の視点からも意義がある。講師は教育関係者をはじめ、芸術家、企業経営者、篤志家、高校生等で、中学生に期待することなどを語っていただいている。

３　おわりに・今後の課題

⑴　キャリア教育の指導体制の整備

学校教育目標を踏まえつつキャリア発達の視点から、生徒が身に付けるべき資質・能力を明確にした上で指導内容を構成し、望ましい勤労観や職業観を育む計画を立てる必要がある。

⑵　各教育機関等との連携強化

就労までも見通した指導を考えていく必要があるため、異校種間、大学等の教育機関、PTA団体、関係行政機関、地域の各種団体等と連携し、ネットワークを構築した上で、多面的に活動を推進していくことが大切である。

第２発表者

森下　龍美　校長（三重県・赤羽中）

【主題】

自らの生き方を考え

主体的に進路を選択する指導の充実

－勤労観・職業観を育てる「キャリア教育」

職場体験学習を中心とした社会体験活動の充実－

１　研究の方法

月１回の中学校長会で、各校の取り組みを報告し合っている。２カ月に１回は会場を各中学校に設定し、授業参観など各校の視察も行いながら、研究・協議を重ね、検討したものを研究報告としてまとめた。基本的視点は以下の４点である。

①　進路選択における生徒の主体性の育成
②　生き方の指導
③　地域との連携における啓発的体験活動
④　中高の連携

２　実践例

⑴　各校が取り組んでいる主な内容

①　地域の人から学ぶ
②　地域の文化を学ぶ
③　職場体験学習
④　修学旅行体験学習
⑤　地元高校との連携

⑵　特色のある学習・活動・取り組みの紹介

実践例①　地域の人から学ぶ

進路選択や職業に対する興味、関心を深め、働くことの意義、自らの生き方について考えることを目的に、地元で働いている様々な人からその人

の仕事や職業選択についてや、中学生につけてもらいたい力についてを講話していただき、生徒が自分を振り返る機会を持つ。また、夏休みの課題として、身近な人の職業に対する考え方を調べ、レポートした。

実践例②　地域の文化を学ぶ

尾鷲檜というブランドを使った工芸品づくりや、地元水産資源を加工した特色ある食文化体験を、地域学習として位置づけ取り組む。平成23年度は校区における特色ある『あぶり作り』に地元水産加工業者他、高齢者の方々の協力を得て、全校体制で取り組んだ。

実践例③　職場体験学習

以下の３つの目的を持って実施した。

①職場体験とその事前、事後学習を通して、働くことの意義や職業のもつ社会的な役割を考え自分の生き方についての自覚を深める。

②職業生活、社会生活を営む上での礼儀やマナーを身に付ける。

③職業の価値に気づき、労働の苦労と生きがいを学び、進路選択の資質と能力を高める。

体験活動を通して、自分と異なる立場の人々の職場における生活を実感することができ、礼儀作法や相手の立場を考えた言動・規範意識を高めるとともに、進路に対する考え方、職業に対する見方・考え方に広がりや深まりが出てきた。

実践例④　修学旅行体験学習

尾鷲にはない職業に触れ、自らの進路についての考えを広めるため地元出身者の協力を得た。また、会社の仕事について話をしてもらったり、工場見学をさせてもらったりし、地域の大人の力だけでなく、地元出身のOBの力を借りて体験活動を行った。

実践例⑤　中高の連携

以前は地元に３つの高校があったが、生徒数減により、今は高校１校となった。現在、出前授業や進路体験講話、地元高校説明会、地元高校校長による進路講話などいろいろな連携を各中学校と高校が取り合っている。

⑶　校長会で取り組んでいる具体的内容

①　大学入試制度説明会

②　紀北地域学校活性化協議会

③　地元高校との懇談会

３　おわりに・今後の課題

紀北地域には、高校が１校だけであり、他地域の高校へ通うため、長時間通学や下宿生活をする生徒も少なからずいる。その分、中学３年の進路選択が重要となっており、中学校におけるキャリア教育や進路指導の重要度が他地域よりさらに高いと言える。校長のリーダーシップによるキャリア教育の推進を図ることが大切である。

また、各中学校の状況はそれぞれ異なり、取り組みも様々であるため、各校の連携を密にすることも大事である。このため、紀北中学校長会の研修をさらに充実させていくことが不可欠である。

Ⅱ　全体協議

愛知県　小と中、中と高が諸活動で連携する場合、学校間の時間的調整が難しいが、どのような工夫をしているか。

富山県　中学校側で時間を決めて依頼し、可能な学校間で行っている。高校との連携も毎年はできていないのが実情である。

愛知県（文書）　小規模校である本校は特殊な地域で、幼小中が同じ敷地内にあり、連携が容易にできる環境にある。また、小と中、中と高においては、教科によって教員がＴＴで授業を実施しており、「学びのつながり」ができている。

石川県（文書）　小中が連携し一斉の研修を、外部講師による研修と授業研究の年２回実施している。また、校長の関わりが学校により違いがあり個性があるが、他校の取り組みを積極的に取り入れるようにしている。

岐阜県（文書）　職場体験の日数は、２～３日が本県では一般的である。校長の努力で４～５日を確保することができている状況である。

福井県（文書）　地域の方を招いて地域指導者教室を実施している。このような取り組みはどの学校でも実施しているが、金銭という尺度ではなく、働くことの意義を生徒に伝える場として設定している。

静岡県（文書）　準備段階から市の職員である市民協働課の男女共同参画担当者と連携し、活動を実施した。地域の力を借り、地域に貢献するキャリア教育を進めている。

Ⅲ　グループ協議

１　はじめに

口頭発表と文書発表されたレポート内容を基に、生徒が主体的に進路を選択し、「生き方」につながる勤労観や職業観を育てる「キャリア教育」の望ましい在り方についてグループ協議を行った。そして、代表３グループから次のような報告があった。

２　代表グループから

⑴　Ｃグループ

県や市町村で実態が異なることがよく分かった。５日間の職場体験が行われているところがあったが、受け入れ側の事情から２日と３日に分けて２カ所の事業所で実施する工夫がされていた。小学校でも職場体験を実施しているという報告があった。内容を深めるという視点から、小中の連携が必要である。謝礼や事務連絡などの予算措置が、それぞれの市町村によって大きく異なっている。

⑵　Ｆグループ

１・２年生の時のキャリア教育で子どもたちに勤労観や職業観を培うという目標を掲げ、指導を積み重ねてきた。しかし、卒業を目前にした指導では、どの高校へ入学できるかという進学指導に終始していることが多い。そのため、高校入学後の早い時期に、夢や希望と現実との大きな差に耐えられず、退学してしまう例が多く報告されている。今後は、小学校、中学校、高校が連携してキャリア教育を充実させなければならない。また、夢が実現できなかった時はどのように乗り越えさせるかということも指導することが大切である。

⑶　Ｉグループ

キャリア教育のねらいがそれぞれの地域が抱える課題で大きく異なっている。つまり、過疎地域では子どもを引き留める手立てを工夫しなければならない。また、人口流入地域では多様な活躍の場所を保証することが必要とされている。しかし、地域の教育力の活性化を図りながら、地域と密着して生徒の育成を図るということは共通していることを確認できた。

子どもがどのように変容し、どのような目的意識を持って踏み出そうとしているかを見極めることが校長の責務である。そして、地域に対する感謝の言葉を今後も大切にしていきたい。

３　おわりに

７本のレポートと熱心なグループ協議から創意に満ちた実践事例が多く示された。各学校で報告内容を参考として、それぞれの実態に応じた実践が行われることを期待したい。

Ⅳ　まとめ

レポートやグループ協議の中で「連携」と「体験」という言葉が共通して多く使用されていた。

まず、「連携」では学年間、幼小中高、保護者、OB、地域、企業など多くの連携が図られていた。

また、市町村単位でキャリア教育の推進をねらいとした人的・財政的支援をする事業が実施されているという報告もあり、地域に応じた行政との連携を今後もさらに充実させなければならない。

次に、「体験」では、職場体験、体験入学、社会体験などが実践されていた。特に、ふるさと体験として伝統芸能やものづくりに挑戦させた活動は興味深かった。体験活動は、キャリア教育を進める中で欠かせない活動である。しかし、総合的な学習の時間が削減され、準備を含めた活動時間の確保が難しくなっている。そこで、これまでに行われてきた活動を、キャリア教育として再構築することも考えなければならない。

分科会全体を通して、キャリア教育と進路指導とはどちらが包括的な概念であるか明確にされていないように感じた。それぞれのもつ意義や価値をもう一度見つめ直すことが今後の課題となるのではないだろうか。

第６分科会

学校生活に適応し豊かな学校生活を築く指導の充実

研究の視点
- ○　互いに高め合える望ましい集団活動や部活動の在り方
- ○　不登校や学校不適応生徒への対応の在り方
- ○　家庭・地域・関係機関と連携した生徒指導の充実

◆口頭発表者	上　裕喜夫（石川・中海中）	上田　敏博（愛知・石巻中）
◆文書発表者	渡邉　明道（静岡・熱川中）	納村　淳治（福井・武生第五中）
	大竹　恵子（岐阜・厚見中）	江崎　勝則（岐阜・輪之内中）
	橋本　弘司（三重・勢和中）	柳原　弘宣（富山・西部中）
◆司　会　者	本江　正芳（石川・白嶺中）	高橋　直廣（愛知・五並中）
◆運営委員	千賀　浩司（愛知・佐織中）	堀田　幸利（愛知・白木中）
	河合　康博（愛知・日間賀中）	
◆記　録　者	小澤　厚義（愛知・大和南中）	内藤　博己（愛知・保見中）

Ⅰ　提案・協議

第１発表者

上　裕喜夫　校長（石川県・中海中）

【主題】

学校生活に適応し豊かな学校生活を築く指導の充実
－家庭・地域・関係機関と連携した
生徒指導の充実－

小松市中学校校長会として「学校生活に適応し豊かな学校生活を築く指導の充実」のために、それぞれの学校の地域環境・特質を活用し、取り組んでいる状況を分析し、今後発展的に取り組むべきことを確認しながら、取り組みの分析と、より実践効果、相乗効果が上がるような研究を進めている。

１　研究の視点

⑴　社会・地域との接点からの企画

⑵　社会性・人間関係を築くための企画

⑶　社会・地域に関わり連携した生活指導の企画

２　実践内容

⑴　社会・地域との接点からの企画

ア　職業人に聞く会（市内全校実施）

職場体験における事前学習として、各界で活躍する職業人を招いて、その仕事を選んだ理由や仕事に対する気構え、困難の克服などを学び、「生き方」を考える機会としている。

イ　地域でのボランティア活動

生徒会が主体になり全生徒で、校区内の文化遺産（安宅・勧進帳の舞台）やその海岸の清掃をしたり、地域貢献として、生徒会企画で、通学路の地下道にある壁画・駅周辺の整備、美化活動を行ったりする。また、梯川流域を校区に持つ中学校が関心、愛着のある団体・個人・市民の多くが連携して、清掃活動を行う。

⑵　社会性・人間関係を築くための企画

ア　中高の連携

中学校２年生が同じ校区にある高校へ出向き、その年度に応じた話題や中学生でも理解可能な共通のテーマを設け、数グループで議論したり、高校生のディベートを参観したりしている。

イ　職場体験学習

全中学校の２年生で実施している。学校によっては、自分たちで職場探しを行い、職場体験を受け入れてもらう交渉をさせるまでのプロセスを踏んで実施している。

⑶　社会・地域に関わり連携した生活指導の企画

ア　PTAと連携した新生代会議

小松市PTA連合会部会が主催している会議で、市内全中学校から男女２名ずつが参加し、学校や家庭での自分たちを取り巻く問題について、議論する場を設けている。

イ　保護者・地域と連携した行事企画

夏休みの最終日曜日に親子ウォーキングを企画している。大人と同じテーブルに着き、企画、検討会などと様々な段階を踏ませ、自主性、協調性、達成感を育てている。（N校）

３　今後の課題

生徒を主体として意識させるための働きかけや仕かけが重要である。大人の満足に終わったり、エスカレートして無理を強いたりすることのないようなコントロール機能（良好な関係づくり）は重要である。

４　おわりに

本市校長会が取り組んだ社会性育成の取り組みは、生徒に学校社会から、やがて大人へと成長し共存、共生する実社会の関わりに目を向けさせ、中学生自らも社会の構成員であり、価値ある自立的存在であることを意識させていく企画であった。校長のビジョンやリーダーシップが生かされるように、保護者や地域の人たちとの間で円滑な信頼関係の構築を確かなものとしておくことが校長の外交的役割として重要である。

第２発表者

上田　敏博　校長（愛知県・石巻中）

【主題】

学校生活に適応し豊かな学校生活を築く指導の充実

－不登校をうまない学級・学校づくりを通して－

豊橋市では、平成16年度より、児童生徒の生活全般を支援する組織として、すべての学校に生活サポート委員会（スクールカウンセラーを交えた事例検討型委員会や小中連携を目指した小中合同生活サポート委員会等）を設置した。この委員会を活性化し、不登校未然防止の基盤である「魅力ある学校づくり」や「わかる授業・楽しい授業の展開」を推進し、新たな不登校を出さない取り組みをしている。その中で、校長としての対応の在り方について研究を進めている。

１　研究の視点

⑴　心の安定を保ちつつ、穏やかで心優しい本校の生徒たちの特質を伸ばす。

⑵　自信をもって人と関わることができるコミュニケーション能力を育成する。

⑶　自己肯定感、存在感、人間関係形成能力の育成、心身のたくましさを高める。

⑷　生活サポート委員会の活用を図る。

２　実践内容

⑴　心づくり部会の活動

ア　生活サポート委員会

すべての生徒の自立に向けた支援策について、担任、養護教諭や外部専門機関等と連携しながら検討する。

イ　道徳体験講話

外部講師を招き自分自身の生き方・在り方を見つめ直す機会とする。

ウ　道徳の年間計画の工夫

構成的グループエンカウンター、心のノートや関連行事と組み合わせ、各学年の発達段階に合わせて実践する。

エ　ありがとうカード・ハートフルメッセージの活用

友人間で互いに感謝や励ましの気持ちをカードに伝えたり、欠席や早退、不登校傾向生徒に対して、学級でメッセージを送ったりする。

オ　「新入生ホープ相談」（２月）

６年生一人一人に中学１年生徒全員で、部活動・学習・進路等の質問事項への返事や励ましの手紙を送る。

カ　「ピアサポート夏季研修会」（８月）

ピアサポート委員・生徒会役員・部活動新部長、そして、級長の約90名で、７時間の１日研修会を行う。

⑵　体づくり部会の活動

ア　黒潮体操

柔軟性・筋力・機敏性などの運動を多く取り入れ、体育祭の準備運動として、各小学校とも連携して実施する。

イ　暁天マラソン

男子4.6km、女子3.6kmの砂浜を含む過酷なレースなので、体育の授業や昼放課を使って３週間ほど練習して行う。

ウ　夏休みの水泳教室

苦手な生徒や意欲のある生徒に、10日間程度実施する。

エ　昼放課の活用

昼放課に、体育館、テニスコート、運動場を開放し、生徒が運動を楽しむ。（体育委員会が道具を管理し、見回る。）

⑶　生活づくり部会の活動

ア　学校保健委員会

年３回の学校保健委員会では、生徒の健康課題を明らかにし、「毎日、朝ごはん食べるぞ！」キャンペーンを実施する取り組みなどを検討する。

イ　朝読書

毎朝、10分間読書の時間を設け、心静かに学校生活をスタートできるようにする。

ウ　帰りの会

帰りの会で、全校放送で全校合唱の時間を設定し、歌う楽しさを教え、豊かな情操の育成につなげる。

エ　生徒会主催のあいさつ運動

生徒会執行部が、全校生徒に呼びかけ定期的にあいさつ運動を行う。

オ　給食委員会

給食委員会による、給食当番への点検活動を行うことを通して、生徒の主体的な活動意欲を促し、責任意識の向上を図る。

３　今後の課題

一人一人の生徒理解と支援の在り方について、全職員がさらに力量向上を図る体制づくりを工夫する必要がある。また、取り組むべき課題を精選・整理しながら、道徳・健康・安全・食育を含めた年間指導計画の見直しと改善を図っていく必要がある。

４　おわりに

家庭や地域との連携を深め、学習形態の工夫を図りながら、学校に適応でき豊かな学校生活を築けるようにするための指導の在り方について、さらに研究を深めていきたい。

Ⅱ　全体協議

岐阜県　職場体験など長期休業中に行う内容について、教育課程に位置付けて進めているか。また、生徒会活動をどのように有効に活用しているか。

岐阜県　生活サポート主任はどのような立場の教員であるか。また、ペアサポート委員の選出方法はどのように行っているか。

岐阜県（文書）　市全体で校長のリーダーシップが発揮された改善例や実践例を取り上げ、「これからの部活動の在り方と校長の役割」を視点にした研究。

富山県（文書）　市全体による調査（部活動数、生徒実態、教員経験など）をもとにした部活動活性化に向けた取り組み。

静岡県（文書）　豊かな学校生活を作り出す視点と不登校対策の視点で取り組んだ体験活動実践と学校不適応対応実践。

福井県（文書）　学校生活不適応への対策、豊かな心の育成や体験活動の充実、地域との連携の視点で取り組んだ魅力ある学校生活の実現や社会的自立に向けての基盤づくりに関わる実践。

岐阜県（文書）　不登校の実態や支援体制、学校生活への適応を工夫する校長の指導性と生徒の健全な成長を促すために人間関係づくりをすすめる校長の指導性を視点にした実践。

三重県（文書）　実態調査に基づいた学校生活に適応した有効な取り組みと家庭・地域・関係機関と連携した集団活動の在り方や生徒指導の取り組みを視点にした実践。

Ⅲ　グループ協議

１　はじめに

第６分科会のテーマを受け、２名の校長先生から「家庭・地域・関係機関と連携した生徒指導の充実」「不登校をうまない学級・学校づくり」を視点に口頭発表があった。この提案を受け、校長としての指導性をどのように発揮していけばよいか活発なグループ協議が行われた。

２　代表グループから

⑴　Ｃグループ

家庭・地域・学校との連携について、各学校の取り組みは、職場訪問や職場体験が多く、祭りへの参加や伝統の継承も挙げられた。地域から中学生の参加要望については、ボランティアのような呼びかけをすれば効果が上がる。

不登校生徒の対応については、SCの活用などを校長がコーディネートすることが大切である。

校長は、様々な問題に追われがちだが、子どもの良い姿を見つけ、ほめる教員集団を育てたい。

⑵　Ｆグループ

部活動と社会体育の関わりについて、部活動指導者として、部活動と社会体育の両方を担当するため負担が大きい。また子どもの体力的な負担も大きく地域型総合スポーツクラブの本来目指すところまで進んでいない。校長会や教育委員会、その他の関係団体の連携と指導が必要である。

不登校生徒を出さないための取り組みには、小中の連携と情報交換が有効で、地域を巻き込んで時間をかけて続けることが大切である。

⑶　Ｉグループ

家庭・地域・学校の連携について、地域おこしを目的としたボランティア活動の実践が出された。

地域の人たちが中心となるが、地域任せにならないよう生徒に自主的に参加させ、地域のために活動する姿を見せ、地域との交流をさせたい。

不登校生徒を出さない対策については、県や市によって加配に特色がある。財政的に無理な部分もあるが、手厚い支援が行われている市町や県にレベルを合わせていただければ、不登校生徒に今以上の関わりがもてると考える。

３　おわりに

第６分科会では、11のグループにより活発な話し合いが行われた。各グループから、校長としての指導性を発揮するために、教育条件を整えることが校長の指導力となる。校長同士が互いに話をする機会をつくり、学校経営に役立てたいという意見が出された。

また、協議会の後半にフリートークの時間があり、東海北陸７県から集まった校長と情報交換ができ有意義だった。自校の成功例や困っていることなどを意見交換できよかった。

Ⅳ　まとめ

１　家庭・地域・関係機関との連携について

集団や社会の一員としてよりよい生活を築くための学習が必要で、そのためには、家庭や地域との連携が大切である。人間関係の構築や集団での役割をどう意識させるかを学ばせたい。

校長として、自校の環境や背景の把握に努め、リーダーシップを生かし、地域や保護者との円滑な信頼関係の構築に努めることが大切である。

２　不登校をうまない学級・学校づくりについて

不登校に陥った子どもだけでなく、予備軍と思われる子どもたちにも、「魅力ある学校」にすることで不登校の未然防止に努める必要がある。そのために、人と関わる能力や自己肯定感、存在感等を高めることに努めなくてはならない。

校長がリーダーシップをとって、人づくりや組織づくりに努め、さらに教職員や関係機関と連携して取り組まなければならない。

３　全体を通して

会の随所で、校長のビジョンやリーダーシップのとり方が議論された。校長として、信頼関係の構築を確かなものにすることが重要であると再確認することができた。

第７分科会

教師力の向上を目指した研修の充実

研究の視点
○　創造性豊かで使命感に満ちた教職員の育成
○　人事評価制度を生かした教師力の向上
○　経営的視点をもった教職員の育成

◆口頭発表者	加藤　正弘（福井・藤島中）	赤堀　建夫（静岡・浜岡中）
◆文書発表者	市原　好美（岐阜・高鷲中）	中西　　章（三重・大紀中）
	田村　範仁（富山・城山中）	寺井　雅樹（石川・鳴和中）
	能見　英紀（愛知・宝神中）	
◆司　会　者	加藤　桂子（福井・大安寺中）	服部　建二（愛知・天白中）
◆運営委員	中谷　　直（愛知・光ヶ丘中）	山田　好広（愛知・桃陵中）
	小池　嘉志（愛知・東浦中）	
◆記　録　者	戸田　清徳（愛知・西部中）	内藤　典子（愛知・田光中）

Ⅰ　提案・協議

第１発表者

加藤　正弘　校長（福井県・藤島中）

【主題】

教師力の向上を目指した研修の充実

－職員組織の構造と教師の専門性の向上を目指す取り組みから－

１　福井県の中学校の特色

⑴　全国学力学習状況調査から

真面目で堅実に生活しようとする県民性が全国学力学習状況調査にも現れている。「学習規律維持が徹底している」が78.2%（全国59.2%）「家庭学習への共通理解ができている」が50.0%（全国27.7%）などとなっている。家庭との連携のもとに、落ち着いた学校経営状況と教育効果の上がる授業が展開されている様子が分かる。

⑵　職員集団の特性

ア　授業改善の意識が高いこと

教委の学校訪問とは別に、研究主任を中心にして自主的な研究授業が定期的に持たれている。

イ　学校経営参画意識が高いこと

平成22年度全国学力学習状況調査における学校質問紙では、「教育目標の達成に向けて全職員で取り組む」と回答した割合が70.6%（全国45.2%）と大変高い。

２　学校組織の運営と連関するOJT

⑴　学校の職員集団がつくるコミュニティ

学校の教師集団にあっては、いくつものコミュニティが存在し、様々な場面でそれらが相互に機能する。コミュニティの果たす機能を高めていくようにリードする役割を持つのが、それぞれのコミュニティのミドルリーダーである。

⑵　教員の力量形成の過程

教員の力量形成は、教員の専門的な力量がひとりの脳の中だけで発達するのではなく、学年組織や教科会、生徒指導部などといったコミュニティの中で実践、省察するといった過程を通してこそ育っていくものである。教師の中に生まれる成就感が教員の意欲向上へと結びつき、“プラスの循環作用”が見られるだろう。この過程のフラクタル構造が、省察的実践者のOJTであり、教師の専門的な力量形成を促すことになると考える。

３　実践の経過とその成果

⑴　本校の課題

本校では、福井県の中学校経営の基本スタイルが機能していない現状があった。

その原因は、学業指導も生徒指導も徹底せず、問題発生の後始末に終始、先を見越した戦略が停滞する状況があった。

⑵　機能しない主任会

毎週月曜日に行う主任会は、形骸化しており、手だてを具体化することができなかった。そのため、各学年でバラバラの対応となっていた。

⑶　「予習復習会議」の実際

機能的なコミュニティへの変化を求めた結果、「予習復習会議」という学校全体の縦と横とをつなぐメンバーが集まる自由度の高い検討会を行った。ここでは、気づいたことや、他から得た情報を「一日の成果と課題」として細かくシートに書き込んだものをもとに、問題解決法を見いだし、克服の手だてや取り組んだことの確認をしていく。検討された内容は、生徒指導主事や学年主任などがペーパーにまとめ、翌朝の職員朝礼で取り組むべき課題や方法を具体的に示した。

４　考察

⑴　教員の研修効果

ア　ネガティブな意見　①毎夜一人の教員に仕事が集中する。②帰宅が遅くなるのはつらい。

イ　ポジティブな意見　①協力する体制をつくることができた。②生徒への接し方が分かった。③他の教員の授業がよく分かった。④多様なアイデアが勉強になる。⑤同じ価値観の共有で不安がない。⑥教員に自覚ができ、意欲が高まる。

⑵　組織運営上の効果

「予習復習会議」は、従来の中学校経営の手法を転換させ、いくつかの効果をもたらした。

①各人が学校経営に参画したため学年会や指導部といったコミュニティに転移。②横の学年会と、縦の生徒指導部や学習部がつながり、全体の指導概念が獲得された。③学年間の隔たりを越え、職員全体に一体感が生まれた。④具体的で分かりやすい実践が協働して実現するという体験から、自信と見通しが持てて、意欲が増した。⑤職員朝礼で毎夜の「予習復習会議」で練られたことをガイダンスするため、ミドルリーダーの自覚が促され、一般教員の実践意欲も高まった。

５　おわりに

現在、「クラウド制」と名づけた縦割り教育を始めたが効果のほどは分からない。ただ、職員は、成果や問題点を修正、改善し即座に臨むことこそが重要という気持ちが広がり、創造的なマインドと機能的な力量が培われつつある。これは福井県や福井県・義務制教職員集団の特性がベースにあると考えている。

第２発表者

赤堀　建夫　校長（静岡県・浜岡中）

【主題】

教師力の向上を目指した研修の充実

－変革期における地区をあげての教職員の育成－

１　はじめに

小笠校長会では、「大量交代期、まさにその時」を意識し、次代の育成を図り、教師力向上を目指した取り組みが、小笠という地域に一体感を生み、子どもや保護者・地域に信頼されていると考える。

２　教師力向上を目指した小笠校長会の取り組み

⑴　マネジメント力向上を目指した教員の育成

地区のリーダーとしての自覚と資質を高めるための「リーダー研修会」を行っている。

⑵　新任管理職の研修と若手教員の育成

ア　新任管理職研修

新任の校長と教頭を対象に、管理職の力量を高めるための研修を年間２回開催している。

イ　３年教員研修

教職３年目の教員を対象に、基礎力定着を目指し、年間２回の研修会を行っている。

⑶　教科等に強い教職員の育成

ア　小笠教育研究協会の組織

協会は、研究部と事業部があり、研究部は各教科・領域等で組織され、研究部長は校長があたる。

イ　一斉研究報告会

年１回、全教職員が集まり、各研究部の計画のもと報告会が開催される。

ウ　教科等に強い教職員の育成システムの構築

校長及び会員により、授業力、実践力があるとして推薦された者が研究委員となり、研究部会を

開催している。そこでは専門教科、領域の調査・研究を進め、エキスパートを育てている。

３　教師力の向上を目指した中学校長会の取り組み

中学校長会は、研修会を年間10回ほど定期的に開催している。平成21年度からは教員の育成に重点をおき、授業力を高める研修を行った。課題は様々あるが、主に教師力の向上を目指した次の２つのことについて述べる。

⑴　学校組織力を生かした若手教員の育成

小笠地区の喫緊の課題は若手教員の育成である。身に付けさせたい力は、①授業力、②生徒指導力、③保護者への対応力などである。各校では次のような研修を実施している。

ア　放課後研修として10年経験未満の教員を対象に、年間５回程度実施している。

イ　毎月行われる校内全体研修の終了後に、若手教員が研修主任などのベテラン教員から指導を受ける自主参加型の研修を実施している。

ウ　校長・教頭の管理職自らが若手教員を対象として直接指導助言する研修会を設けている。

⑵　授業参観を通した教員の育成

小笠中学校長研修会では、授業参観を実施し、会場校は校内研修の取り組みを説明し、参観後は各校長から意見や感想をもらい、授業改善の推進に役立てている。

４　教職員の危機管理能力の向上

事故が起きた時の対応が十分できないという問題点から危機管理シミュレーション研修を全小・中学校で毎年、行うこととした。

⑴　危機管理シミュレーション研修会

この研修では、想定により教職員が様々な役割に扮し疑似体験した。その後、改善につなげる活動を行った結果、教職員は、先を見通した指導ができ、児童・生徒の自己管理能力も高まった。

⑵　今後の課題

これまでのように事故対応だけでなく、東日本大震災のような津波等を想定した危機管理シミュレーションを実施する必要がある。

５　おわりに

常に地域課題を意識して研鑽した教職員が学校経営に参画する姿は大きな喜びとなっている。今後は教職員自らが意欲を持って力量を高めていくことが必要である。

Ⅱ　全体協議

愛知県　縦割りの授業形態での評価はどのように行っているのか。

福井県　本校は２学期制のため、まだ評価を行っていないため明言できないが、一斉授業、学年別の授業、全学年の縦割りと様々な形態を通してきめ細かくみている。

富山県　貴校の問題は、一般的な組織力の低下についてか、あるいは学校独自のものなのか。

福井県　本校独自の特性について述べている。市内では平均年齢が最も高いためか、変化に対応する意欲が不足している。そこで今年の目標をトップダウンでなく、職員が時間をかけて話し合い、もみあいながら創り上げた目標に向けて実践している。

愛知県　クラウド制は縦割りを生かすよい方法であるが、どの教科でも縦割りで行っているのか。

福井県　クラウド制は音楽など芸術分野で効果的な方法である。しかし、音楽でも学級単位、学年単位で行う方がよい場合もあるから、すべてにおいて取り入れているわけではない。

岐阜県（文書）　各校に多い50代教員のモチベーションを維持し、中堅教員をリーダーとして育てることが校長の責務と考え、若手教員を含め、将来を見据えた研修を実践している。

富山県（文書）　富山県東部地区の教職員の資質能力向上を図る取り組みについて検証した結果を紹介。特に二人担任制におけるベテランと若手教員の組み合わせで効果が上がっている。

石川県（文書）　将来のためにミドルリーダーの育成は喫緊の課題。毎回のミドルリーダー育成研修会には市内の校長が必ず参加し、充実した研修を行っている。

三重県（文書）　PDCAサイクルを学校経営に取り入れ、組織力の向上を図り、やる気が湧いてくる実践を心がけている。

愛知県（文書）　「ミドルリーダー育成」という考え方から、いろいろな指導場面の中心となる教員を中核となる教員と捉え、その育成を目指して研究している。

Ⅲ　グループ協議

１　はじめに

前半の口頭発表・文書発表者の発表内容を受け、12のグループに分かれて協議を行った。地域性や学校規模など、様々な特色がある一方で、「教師力の向上を目指した研修の充実」を推進するに当たって共通の課題も浮かび上がり、活発な議論が交わされた。以下に代表グループの報告をまとめる。

２　代表グループから

⑴　Ｃグループ

各地域の特色ある実践が紹介された。静岡の校長会が指名した教科別授業リーダーの育成、愛知の校長会と市教委が連携し、２～４年目の若手教員を対象とする教師塾の運営、岐阜の校長会が推薦し30代40代の教員を３年間集中して鍛える研究員制度など、中堅教員と若手を校長会と市教委・県教委がどのように連携して育成すべきか、校長がどのように指導性を発揮するかが話題の中心となった。

⑵　Ｆグループ

若手教員をどのように育成するかが意見交換の中心となった。クラウド制という縦割り活動を実践している学校では、教室を学年縦割りで配置するとともに、教科の部屋も特設することで、生徒だけでなく教員の側も先輩が若手教師を指導しやすい環境を整えている。また、退職校長が授業アドバイザーとして後輩を指導したり、年齢別のグループ研修会で自由な討論の雰囲気の中、学校運営への参加意識を高めたりする報告があった。

⑶　Ｉグループ

若手教員の育成のために、どのようにして授業力をアップさせるかが話題の中心となった。校内での公開授業の実施や、教師が個々に目標設定することの効果について、あるいは、外部の刺激を受けるための複数校での相互研修、特別支援教育の視点に立ったグループによる授業実践などの報告があった。世代交代を見越して、思い切った校務分掌の改革についても意見交換がなされた。

３　おわりに

地域差はあるものの、ベテラン教員の大量退職に伴い、年齢的に中堅と呼ばれる教員が減少し、経験の浅い教員が増えていることが課題である。それらの教員の資質や力量を向上させるとともに、50代の教員の研修意識をどのように高めていくかについて、校長の指導力を発揮するための様々な取り組みが紹介された。

Ⅳ　まとめ

１　年齢構成の偏りへの対処

多くの地域で課題となる、教員の年齢構成の偏りに着目すれば、「学校運営の中心となるのは中堅教員（ミドルリーダー）である」というこれまでの発想から転じて、年齢や教職年数に関係なく「中核となって活躍すべき教員」という捉えで、学校運営に積極的に参画できる教員への研修の在り方を探ることも必要である。

２　研修時間の確保

授業時数の増加、問題行動への対応等で心身共に疲弊し研修意欲が減退している教師でも研修によってさらなる力量向上を図ることは重要である。

地区の校長会や市教委等が実施する研修会だけでなく、校内で勤務時間内に行われる学年会や生徒指導部会・教科部会などの学校組織を活用した研修の手だてを工夫することが、その学校に必要とされる力量向上を図る手段となり得る。

３　今後の課題

教師自身が自己の力量や能力・資質の向上を目指して研修するためには、校長の果たす役割が大きい。学校組織を生かし、校内で効率的に研修時間を確保すること、教師に学校経営への参画意識と経営的視点を持たせること、校長が自ら力量と資質の向上に努めることなど、教師力の向上を目指すためには、今後ますます校長としてのリーダーシップを発揮することが求められる。

第８分科会

時代の要請に応える学校経営の充実

研究の視点
- ○　中・長期的展望に立った学校経営の推進
- ○　特別支援教育の推進体制の整備と保護者への啓発
- ○　学校評価の充実

◆口頭発表者　辻本　誠一（三重・尾呂志学園中）　山内　正一（岐阜・落合中）
◆文書発表者　片山　敬良（静岡・北　中）　松井　博文（福井・金津中）
川高　正嗣（富山・舟橋中）　野川　　徹（石川・河北台中）
尾出　秀夫（愛知・平坂中）
◆司　会　者　東　　俊之（三重・相野谷中）　木下　　一（愛知・鶴城中）
◆運営委員　千田　健三（愛知・北部中）　上田　　信（愛知・大治中）
小田　正樹（愛知・北部中）
◆記　録　者　天埜　幸治（愛知・春日中）　中野　茂久（愛知・金屋中）

Ⅰ　提案・協議

第１発表者

辻本　誠一　校長（三重県・尾呂志学園中）

【主題】

時代の要請に応える学校経営の充実

－年間の具体的行動計画（PLAN）の策定にポイントを置いた学校評価と学校改善活動の推進－

１　学校評価の充実と学校改善活動の推進

⑴　学校評価の重要性

学校が「生きる力」を育む場となるためには、家庭や地域との連携・協力の下、常に教育活動の成果を検証し、学校運営の改善を目指していく努力が不可欠である。つまり学校評価の充実には、まさに校長の資質そのものが問われていると言える。

⑵　三重県型「学校経営品質」

これは「学校経営の改革方針」というPDCAサイクルを基本とした行動のツールと、「学校経営品質アセスメント」という点検・診断のツールの２つからなる学校マネジメントの仕組みである。

しかし、形式的に陥りがちな点やシート作成が目的化し、次年度の改善につながらないなどの課題があり、校長として、いかに有効に機能させていくか、という対応が求められている。

⑶　紀南中学校長会の取り組み

教職員の「達成感」「やる気」につながる学校の組織的な改善活動の取り組みや、PDCAサイクルが有効に機能するための学校評価の在り方について研究に取り組んでいる。

２　尾呂志学園の実践例

⑴　尾呂志学園小中学校の概要

地域活性化の願いとともに小中併設校として再編され、地域の文化的拠点として、地域の方の学校教育への積極的な参画や、小中教員の授業交流を中心とした小中連携教育が特色の学校である。

⑵　学校自己評価を有効に機能させるために

年度当初策定の学校経営方針を、教職員全員で共有化・具体化するために２つの提案をした。

ア　教職員の総意で「学校経営方針」を決定し、前年度の結果を必ず反映させ、検証しやすいシンプルで具体的な目標や計画を位置付ける。

イ　教職員全員が認識すべき観点を整理する。

・観点Ⅰ…基本理念、学校経営方針から、各担当別の計画にかけての関連性を整理

・観点Ⅱ…改善活動の優先順位を決め、到達度のわかる数値目標を設定

また、自己評価においては全教職員参加の下で行い、改善方策やまとめを保護者等に公表する。さらに学校関係者評価を実施し、具体的な取り組みの改善を図り、次年度のPLANに反映させていく。

⑶　成果・課題と今後の方向性

教職員のモチベーションは向上し、改善につながる評価が出されるようになってきた。PDCAサイクルが機能的に回るようになってきたと考えられる。また、活動の優先順位付けで、多忙感の解消と意欲の向上という効果も表れてきた。

３　校長として進めるべき取り組みについて

学校評価の充実、学校経営の改善のためには、やはり校長としてのリーダーシップが問われている。現在、紀南中学校長会として検討している「校長としての具体的な取り組み」について紹介し、問題提起としたい。

⑴　的確なビジョンとわかりやすいプラン

校長の的確なビジョンとわかりやすいプランは、教職員に対して教育活動の方向性を示すとともに、改善の成果を直接に感じることができ、達成感や充実感を持たせることにもつながっていく。さらに、保護者や地域へ、学校としての組織的な改善活動に関する説明責任を果たすという点からも、説得力を持つ資料として重要である。

⑵　組織文化や組織土壌の構築

組織的な改善活動を進めていく上での土台は、活力があり、しかも信頼関係にあふれた組織文化や組織土壌である。そのためにも、情報の収集と共有を大切にし、教育活動の計画から評価に至る記録とその蓄積、また、常に検証することのできるチェック体制の確立にも配慮する必要がある。

４　おわりに

教職員自らの手で、よりよい学校を創り上げていくためにも、学校改善活動に対する教職員の「やる気」を引き出すという視点から、信頼関係を日常的に創り上げていく校長としての姿勢、リーダーシップがますます重要になってくる。

第２発表者

山内　正一　校長（岐阜県・落合中）

【主題】

時代の要請に応える学校経営の充実

１　研究の視点

教育課題が山積する中、「学校力」のさらなる向上を目指した中・長期的な展望に立った学校経営が求められている。校長は教職員、生徒、保護者、地域住民にとって共有・支持される学校経営ビジョンを形成し、学校経営の推進にリーダーシップを発揮することが重要である。東濃地区校長会では、こうした構えに立ち、研究を進めてきた。

２　実態調査による現状の把握と分析

⑴　「学校経営ビジョン」について

ア　学校経営ビジョンの提示について

・　前年度の「学校評価」を基に学校課題を捉え、学校経営ビジョンに反映させた。（85％）

・　学校でデザインされた教育課程が「経営方針」となり、重点化された。（80％）

・　生徒や保護者、地域、教職員の状況、教育界の要望等を加味した。（73％）

イ　教職員への指示・徹底について

「学校評価」の項目に「学校経営ビジョン」が盛り込まれ、数値目標を掲げた。多くの学校では、マニフェストとして説明している。

⑵　「学校評価」について

教職員による評価は定着しているため、今回は教職員以外の学校評価を調査した。アンケートの対象は「保護者・生徒」とし、「学校活動全体」と「授業について」の２面から調査を実施した。

＜保護者を対象＞

学校の教育目標、開かれた学校、安心安全、学習姿勢や授業の工夫について問う学校が、各項目とも85％以上であり、学校としての取り組みや教師の姿勢についての評価を求める傾向がある。また、個への配慮、授業姿勢、授業の理解度、指導方法などを問う項目が90％前後となっており、生徒に学力が身に付く授業かどうかの評価を求める傾向があることがわかる。

＜生徒を対象＞

授業のわかりやすさや学校生活の充実度を問う項目が95％以上となっている。また、授業姿勢や

授業の理解度を問う項目が80％前後となっており、充実感のある学校生活、学習規律が整い、わかりやすい授業を目指したいという学校としての願いが感じられる結果となった。

⑶ 「特別支援教育」について

校長は特別支援教育校内委員会を設置し、きめの細かい個への対応を働きかけ、特別支援教育コーディネーターの機能化を図っている。校長としての主な働きかけとして、管理職・特別支援教育コーディネーターの授業巡視による指導を挙げた学校が50％に上る。また、通常学級に在籍する個別の支援が必要な生徒への対応に向け、授業改善の指導をしている。

３　課題克服に向けた実践

⑴ 「学校評価」に関わる実践

「保護者」及び「生徒」を対象とした「学校評価」における課題は次の２点である。

・保護者アンケートの精度をいかに上げるか。
・生徒アンケートの結果をいかに還元するか。

これらの課題が克服されてこそ、「学校評価」がより確かな学校経営ビジョンづくりに寄与すると考えられる。この観点に立ち、現在、先進的な取り組みをしている学校の実践例を以下に挙げる。

【事例Ａ】＜保護者アンケートの精度を上げる＞

年度始めにアンケート実施を明確に宣言し、保護者側に予め評価者としての視点を持ってもらう実践で、評価者としての保護者の意識が早くから定まり、アンケートに答える際の情報不足感が薄まる効果があった。

【事例Ｂ】＜保護者アンケートの精度を上げる＞

授業参観日前に、各学級委員が公開授業に関する「授業の見どころ」等を記したプリントを作成し、保護者に配る実践で、保護者側に授業を参観する視点が明確に備わり、評価もより客観的になったと考えられた。

【事例Ｃ】＜生徒アンケート結果の還元＞

項目によっては直接生徒に集計結果を示し、生活そのものについての改善を訴える方法で、校長が全校集会で直接生徒に示し、自信や誇り、次なる目標を意識させることができた。

【事例Ｄ】＜生徒アンケート結果の還元＞

教科ごとの生徒による授業評価を、教科担当自身が集計・分析し、そこから得られる改善策を教務主任等に報告するという取り組みで、生徒による授業評価に教科担当が真っ直ぐに向き合おうとするものである。生徒の教科への取り組み方と、授業への率直な感想の２面から教科担当としての分析を行った。

⑵ 「特別支援教育」に関わる実践

学校としての課題を捉えつつ、特別支援教育への着実な取り組みを積み重ねていくところに、校長としての働きかけの重要性が増してくる。

【事例Ｅ】＜特別支援教育＞

・取り組み１：職員の共通理解
・取り組み２：「困り感」を整理した支援計画の作成
・取り組み３：支援計画を基にした環境づくり

４　おわりに

アンケート調査を通して、多くの学校で現状把握を明確にした上で学校経営が行われていることや、実践上の課題を改めて再確認できたことは成果であった。今後は、学校経営ビジョンを教職員・保護者へより浸透させ、「学校力」向上を目指した実践例を蓄積していきたい。

Ⅱ　全体協議

愛知県　学校経営という視点では必ず話題となる「学校力」とは、やはり学校の教育力であり、地域力も含めた、学校の教育活動全般における総合的な力と確認できた。

福井県（文書）　その学校力向上という点では、学校の取り組みの姿が見える「スクールプラン」の作成、公表を通して学校力向上につなげている本校の学校評価の取り組みを文書報告で掲載した。

岐阜県　学校評価に対する取り組みは、時間的にも内容的にも膨大であり、各校の創意工夫が今後も検討される必要がある。また、小学校の統廃合が各県で続いているが、発表校のような小中併設型こそ、むしろ時代の要請に応え、これから増えていくのではないか。

愛知県　本分科会のテーマである「時代の要請」という意味を是非、皆で考え、グループ協議の中でもつきつめて話し合いたい。この先、社会がますますグローバル化していく中で、「未来を切り拓く生徒の育成」という視点も重要である。

Ⅲ　グループ協議

１　はじめに

提案レポートを基に、学校評価・時代の要請に応える学校について、12のグループに分かれ自由な雰囲気の中で活発な意見交換が行われた。

２　代表グループから

⑴　Ｃグループ

学校評価は定着しているが、形骸化してはいけない。評価者が、どれだけ子どもや教員の取り組みを見ているかが重要である。問題点としては、校長が２～３年で異動することで長期的な評価が難しい。親は子どもを通して評価しているが、それが適正な評価になっているのかどうかは、はっきりしない。

今の子どもたちに地域で何ができるかを考え、学校の方針をはっきり言えることが大切である。人の話を聞く、あいさつをするなど不易の部分とコミュニケーション能力の育成が大切である。

⑵　Ｆグループ

評価メンバーはPTA役員OB、元校長、元教員など学校のことをよくわかっている人がよい。

地域の将来を見通した地域の要望を大切にした学校づくり、その地区の良さを生かした特色ある学校づくりが必要となる。学校は学ぶところ、学力をつけることが普遍のテーマである。保護者・子ども・教職員の三者の願いで決めたい。時代の要請なのか、行政の要請なのか、わからなくなっている問題もある。

⑶　Ｉグループ

学校評価について、それぞれの地域で共通した意見や課題がある。不易と流行を踏まえ、時代の流れに即した評価を行う。子どもの顔の見える評価でありたい。評価したことについては、真摯に受け止める。

校長としてリーダーシップを発揮し、ビジョンをはっきりと出すことが、現場では必要である。

３　おわりに

各グループとも、それぞれの地域の実態や取り組み方の違いについて、活発に意見を交換した。そして、これからの時代にあった学校のあるべき姿について、考えを深めることができた。

Ⅳ　まとめ

１　中長期的展望を意識した目標と短期の目標をどう関連させるか

中長期の目標は、時代の要請を含んだ理念的、抽象的なものになるが、ときには数値で評価できる短期の目標にしなければならない。今取り組んでいることにどんな意味があるのか、将来どんな人間を育てようとしているのか自覚していなければ、学校経営がぶれてしまう心配がある。

２　学校評価の充実をどう図るか

校長のビジョンとプランの提示、自己評価、学校関係者評価を公開し、運営協議会で改善点を協議する。PTA総会などで学校評価の主旨を話し、評価者として意識を高め、生徒にも評価者の視点をもたせる。評価のための評価にしないことが大切である。アンケート内容が議論しやすく、評価できるものになっていることが大切である。

３　校長のリーダーシップと協働意識をもった教職員をどう育てるか

校長に期待されていることは、現状を確実に把握すること。教科担当が自分のクラスのアンケートの集計分析をすることで、授業評価に直接向き合わせる。全教職員で目標の共有化・具体化を行い改善の優先順位を決め、教職員のモチベーションを高める。校長が生徒に直接働きかける。協働体制づくりのために自己申告・自己評価書をアクションプラン達成のツールとするなど、いろいろな実践が紹介されているので参考にしてほしい。

４　全体を通して

校長が的確に問題を把握し、具体的なビジョンを語り、先頭に立たなければいけない。そして、教職員全員で議論したり教職員評価などの手だてを使ったりして、協働意識、つまり学校経営意識をもった教職員集団を育てることが大切である。

記念講演

演題「素直な心が才能を伸ばす！」

講　師　山田　満知子（フィギュアスケートコーチ）

インタビュアー　平林　良也（愛知県東海市立名和中学校長）

司会　大変長らくお待たせいたしました。ただいまから記念講演を始めます。今日の講師は山田満知子先生でいらっしゃいます。講演会は会談の形式で行いたいと思います。山田先生にインタビューをされるのは、東海市立名和中学校長の平林良也先生です。それでは、講師の山田満知子先生をお迎えいたします。平林先生、よろしくお願いをいたします。

平林　東海市立名和中学校の平林と申します。よろしくお願いします。

山田　山田満知子です。よろしくお願いします。

平林　今、実際の山田先生を目の前にして、興奮と緊張で震えています。本日はよろしくお願いします。

山田　ありがとうございます。お願いします。

司会　もう、皆様の方が、山田満知子先生のことはよくご存知かと思いますが、ここで少しお時間をいただきまして、私からご紹介を申し上げたいと思います。

山田満知子先生は現在、中京大学フィギュアスケートスペシャルアドバイザー、名古屋スポーツセンター専属インストラクターでいらっしゃいます。お生まれは、1943年６月26日、もちろんこの愛知県名古屋市でご誕生されました。

金城学院高校、金城大学をご卒業され、この間、全国高校スケート選手権、並びに国民体育大会冬季大会の少年少女の部で、それぞれ優勝していらっしゃいます。

1988年、カルガリー冬季オリンピックコーチを務められ、翌年1989年には文部省スポーツ功労者賞、さらにエイボン女性年度賞・スポーツ賞を受賞されました。

1992年のアルベールビル冬季オリンピックコーチを、2002年にはソルトレークシティー冬季オリンピックコーチを務められました。そして、2005年、文部科学省国際大会最優秀者賞を受賞されております。

ご周知のとおりではございますが、先生はたくさんの選手を育てられました。伊藤みどり、大島淳、小岩井久美子、恩田美栄、中野友加里、浅田真央、浅田舞、村上佳菜子さんなど、本当に多数の選手でいらっしゃいます。

それでは、山田先生、平林先生どうぞよろしくお願いいたします。

平林　では、先生。素晴らしい経歴といいますか、業績ですよね。ただ、お生まれになった年だけは余計な情報でしたね。

山田　（笑）はい。

平林　早速ですが、ご講演の演題、「素直な心が才能を伸ばす！」に沿って、インタビュー形式で会談をさせていただきます。よろしくお願いします。

１　先回のフィギュアスケート世界選手権について

平林　まず、最初に伺いたいのは、先回のフィギュアスケート世界選手権について、お話しいただけないでしょうか。

山田　世界選手権ということなんですが、フィギュアスケートというのは、７月が年度替わりです。学

校だと４月が年度替わりですよね。３月に世界選手権がありまして、それで７月からシーズン頭になり、８月の半ばにアジア大会が始まります。

それで、９月になりますとグランプリシリーズといいまして、まあ日本でいうとＮＨＫ国際がありますね。ジュニアのグランプリが始まります。シニアは６箇所。アメリカ、カナダ、ロシア、フランス、日本、中国で行われて、最後がグランプリファイナル大会です。

ジュニアは８箇所で行われます。とりあえず、９月（８月末）からジュニアのグランプリが８回ありますよね。それが終わるとシニアが６回あります。それで、最後にジュニアもシニアも、グランプリの成績優秀な人のファイナルというのがあって、年が明けて３月に世界選手権です。

その間には、いろんな国際大会とか国別対抗とか、いろんな大会がたくさんあるんですけれども、今は本当に大会も多くなりまして、毎週やっていますね。

それでは、オフはどうかというと、今、フィギュアスケートすごい人気がありまして、エキシビジョン、あのアイスショーですね。いろんなショーがたくさんあって、すごく忙しいですね。

それで、とりあえず、その合い間を縫って来シーズンの振付プログラムをするんです。今は海外に出かけて振付をする人が多くなっています。今まではうちの佳菜子も、日本で私のところのグループでやっていましたけど、去年から、海外に行かせています。今年も２回、彼女の振付に出かけました。そんな感じで、選手はオフの方が、かえって忙しいかな。シーズンの方が、決まった練習をしながらいくという形になるんです。

今、お話のあった世界選手権。その前の前の年ですね。日本で世界選手権ということで予定されていたんですけれども、例の東日本大震災がありまして、それが世界選手権の２週間前ぐらいだったの。みんな１年間、それに合わせてピークをずっと持ってくるじゃないですか。急に中止というか、延期ときたかな。最初は。

で、「ええ？」私たちは日本に住んでいるからよく分かるじゃないですか。会場は東京だったですし、そんなに被害もなかったですから。だから、「あるの、ないの？どっち」って。「どれだけ？１カ月あと？」とかいう感じです。そのうちに、やっぱり外国は「日本へは行きたくない、みんな危ない。」というふうに思ってね。日本に行きたくないというので、結局、日本側が中止というふうに出した。「じゃあ、今シーズンは世界選手権ないの？」と言ったら、ロシアが次回の冬季オリンピックは、ソチが会場なので、ロシアが手を挙げて、うちでやらせてくれということで、１カ月ちょっと遅れてロシアで世界選手権という形になったんです。

もうみんな、「ああ、なくなるのかな」「あ、やるの！」みたいな感じで、本当にバタバタした世界選手権が、前年度ね。そのため１カ月遅れたので、次からのシーズンがものすごく押せ押せになってしまったんですよ。次のシーズンが、去年のシーズンね。その間に、みんな靴を替えたり、振付に行ったりものすごく忙しいんです。スケート靴というのは、今、佳菜子で２、３カ月に１回買い換えるんですね。その靴もね、ものすごく高いんですよ。日本の靴もありますけど、ほとんどのところが外国に出しているんです。ものすごく高いのにぴったりこない。同じメーカーで同じもので作るんですけど、皮を引っ張ったり、皮を取るところが違ったりして、随分なんというのかな、こう感じが変わったりとか、同じように作っていても変わってくるんですよね。

それで、エッジがあるんですが、ちょっとバランスが変わっただけでもカーブがアウトになったり、インになったりするものですから「ちょっと違うんじゃないかな」って、やっているうちに膝がやられたり。フィギュアスケートなんかは細いエッジの上に、やはり無理して乗るものですからね。そこでジャンプを跳んだりいろいろするじゃないですか。

結局、佳菜子の場合も、去年は靴が合わず、もう何回……、靴屋さんができるんじゃないかと思うぐらい、とっかえひっかえやっても、なかなか合った靴ができず、グランプリシリーズというのはあまりいい結果が出ないで終わり。

ちょうど全日本が、いつも12月末にあるんですけど、そのころになんとか足に合う靴が見つかり、全日本はまあまあの成績をとって世界選手権に選ばれて、そこから結構、絶好調でした。行く前の日まで中部ブロック。全日本に出るために、名古屋でしたら中部ブロックに勝ち抜いて、西日本で勝ち抜いて全日本になるわけですけれども。そういう大会があってね。それも出て、最高のコンディションで行ったんですけど。ちょっと私のミスだったのかなあと思うんですけど、疲れが溜まってね。飛行機の中でもどすは、もうぐったりしちゃって大変でした。向こうに行ってから、彼女は食事もできませんでしたので、何か滑っていても滑っている感触がないというんですよ。氷と自分の体とがしっくりこない。というので、あまりいいコンディションではなく、それでまた世界選手権を戦ったんです。言い訳になっちゃうかもしれませんけど、よくなくてね。でもまあ、前年度８位から５位に一応、順位は上げたんですけど、彼女にしては最高ではなかったかな。

皆さん、よくご存知の浅田真央ちゃんね。真央ちゃんは佳菜よりもよくなくて、６位だったんですかね。みんなは、「ああ、もう浅田真央も終わりかなあ」というふうに思っていらっしゃる方もたくさんいらっしゃるかもしれませんけれども、すごく調子よかったんです。真央も、佳菜も、本当に調子よく一緒のリンクで練習しているんですけど、「真央は今年は良い成績が出せるんじゃないかな」というぐらい安定していた。ところが、向こうに行ってから、彼女も「どうしちゃったの」というぐらい、バタバタと落ちてしまった。

もう一人の鈴木明子ちゃん、彼女も愛知県豊橋市なんです。明子ちゃんは練習していて、たとえば調子いいときと悪いときの差が少なく、このペースのまま試合が迎えられて、試合も決していいほうではないけど、まあフラットぐらいで、彼女としては出来は真ん中だったかな。だから、まあ３位という結果が出たんです。

とりあえず、世界選手権とか、フィギュアの試合というのは、冬の競技じゃないですか。プレスの人たちがいっぱい日本からも来ますよね。その中で、いつもの世界選手権はフジテレビが放映権を持っていて、グランプリシリーズはテレ朝さんが放映権を持っているのかな。そうすると、ほかのテレビ局はリンクの中で取材できないんです。リンクの外はいいけど、リンクの中の映像はそこから買わないといけないんです。

結局、世界選手権は新聞社はみんな入れますけれども、フジテレビさん以外のＴＶ局は、みんな外で選手が来るのを待っているんです。選手が練習に入るところの映像を撮ったり、選手が練習を終わってバスに乗り込むところを撮ろうとしている。いつもは冬ですから寒いところでいつも凍えて、「寒いな、まだ選手来ないのかよ」なんて言いながら待っているんですけど、今年はフランスのニース。高級リゾートで、すごくぽかぽか暖かくて、みんなショートパンツ。下手したら犬の散歩みたいな感じで、今までの世界選手権と全く模様が変わってて、それでプレスの人たちも真っ黒に日焼けしちゃったというぐらい感じが変わってて。私たちも環境としては試合の緊張感は出なかったけど、すごく楽しかったです。特にニース、フランスというと高級ブティックもいっぱいあって、私なんかはお買い物ができてラッキーというので、いい世界選手権でした。（笑）

来年の世界選手権はカナダのオンタリオ州ロンドンというところだと思うんですけれども。もしも、佳菜ちゃんが選ばれたら、やっぱり彼女の持っている力が、トップで一番いいところとまではいきませ

んけれども、真ん中ぐらいまで出せるコンディションで行きたいなと思っています。それが世界選手権の話です。よろしいでしょうか。

２　伊藤みどり、浅田真央、村上佳菜子の違い

平林　はい。先ほど名前が出ましたけど、山田先生は数々の有名な選手を育てていらっしゃいます。特に有名なのが伊藤みどりさん、浅田真央さん、村上佳菜子さん。このお三方の選手の違いというか、そういうものは、何かあるのでしょうか？

山田　全く違いますよね。まず容姿も違います。それから、性格も違います。まず、伊藤みどりです。今、44かな、ぐらいになっているのかな。あの子。昔はよく、みどりちゃんて言っていましたけど、みどりちゃんではもうないんですけど。１m44かな、身長。ものすごい小柄ですね。ぽっちゃりしていて、日本人独特のO脚？。それがジャンプに強いというふうに言ってくれるドクターなんかは、あの足だからというので、見た感じはズングリムックリという感じで。特にフィギュアスケートというのは気品高くて上品なスポーツ。他のようにこうヤーッと投げるとか蹴るとかではなくて、バレエ的な要素もありますので、スポーツの中では、上流社会の気品高く、上品なスポーツとされていますよね。

今でこそ違いますけれど、昔は日本人というとアメリカ人とか西洋人から､｢ああ｣という感じでした。お金は持っているけど田舎くさい。本当に外国から見たときに「はあ？」という感じです。今の子たちは足も長いですけど、昔は日本人、スタイルもよくないですし。

だから、どんな技術を持っていても日本人というだけで勝てない。主観的なスポーツですから、球が入ったら勝ちとか、タイムが速かったら勝ちではなくて、見た感じですから日本人は勝てないスポーツというふうにされてたんですよね。だけど、伊藤みどりが、結局、フィギュアスケートを塗り替えたというか。すごくパワーのあるスケートで、美でもスポーツの美もあるんだというぐらい、ビャーンと跳んでいくというか、あのジャンプね。

あの当時、クリスティー・ヤマグチとか、カタリーナ・ビットとかと、彼女は戦ってたんですけれども。テレビで見ると、速度って、こう追いかけちゃうから、あまり分からないじゃないですか。ビットさんたちなんかの妖艶な姿と比べて、「何で、みどりがあんなに勝てるんだ」と思う方もいらっしゃるかもしれないですけど、実際にリンクに来ると、もう速度が全然違う。だから、ウワーッてこう、ウワーンと跳んでいく豪快さ。だから、やっぱりこれは世界中がやっぱりみどりちゃんのことは「天才スケーター」と言ったんだと思います。

最初、世界ジュニアに出たころは、小学校５年生でしたからね。でも、選手の妹とかと間違えられて、役員さんが「ああ」って言ってだっこして歩いてくださったりとか。特に私なんかは名古屋の大須というところで教えてたんですけれども、東京でいえば浅草みたいに下町ですよね。フィギュアスケートは気品高くて上品なスポーツということで、東京は品川にプリンスさんが３面リンクを持ってて、フィギュア専門リンク、アイスホッケー専門リンク、一般営業リンク、隣にはプリンスホテル。それで、お母さんたちが外車に乗ってダーっとみえて、リンクに下ろして「よろしくお願いします」って言って、ホテルでコーヒーなどお飲みになり、選手が練習終わるのを待って連れて帰る。（笑）もう笑っちゃうでしょう。

うちは大須。リンクの下はたこ焼き屋、そしてラーメンハウス。「先生！」って電車で子どもを連れてきて「先生、温かいたこ焼き買ってきたけど、食べますか？」みたいな。それで気品高くできるかという感じなんですけれども。

私はもともと競技には、「強化」と「普及」とがあると思うんですね。強化というのは一流選手をつくる強化部。普及というのはスポーツを普及させる。

私は自分で名古屋にいて、そんなに一流の選手

でもありませんでしたしね。普及のコーチ。スケートでみんな明るく、いい青春時代を過ごしてほしい。それで大人になったら、いいお嫁さん。恐いお姑さんのところでもちゃんと仕えられる女の子。どこか就職しても立派にちゃんとついていける男の子。フィギュアスケートを通じて、何か委員会もそうでしょうけど、そういう子どもたちをつくっていきたいなと思って指導してたんです。

そうしたら、みどりみたいなのが来て、何か「強化」をやらされた。一流の選手に仕立てあげなきゃいけない。だって能力はすごくあるわけですから、みんなが、日本中が期待している。やらなきゃ、やらなきゃってやっているうちに、「なんか山田コーチのところに行ったら、トリプルアクセル跳べるらしい」とか、跳べるわけないんですよね。みどりは跳べましたけれども。でも、そういう何か強化のコーチにどんどん追い込まれて、今、強化みたいなふうにやっているんです。

もともとはそれが目標じゃなかったものですから、だから、みどりのしつけとしては、元気よく明るい子どもというだけでした。世界選手権で、選手団がダーっといるじゃないですか。こっちにＩＳＵって、あの世界の連盟の偉い人がいて、ドローといって抽選で滑走順を引くことがあるんですね。今は形式変わりましたけれども、一人ずつ名前を呼ばれて出てきて、抽選するんですけど、滑走順が遅い方が得なんです。

平林　あ、得なんですか。

山田　はい。だって考えてみてください。主観的なスポーツなんですよ。そうすると、昔は６点満点だったんですけれども、早い滑走で「この子、うまいなあ」と思っても、まだうまいのが出てくるかもしれないと思ったら「5.5ぐらいにしとこうかな」と人間思うじゃないですか。でも、遅い滑走で、あと２人しかいないというと、うまいと思ったら、「5.8つけよう」とできるでしょう。だから、滑走順が絶対遅い方が得なんですよ。

結局、そのドローのときに、カタリーナ・ビットは昔、東ドイツというのは共産圏の国ですからスターづくり、選手づくり、国のスターをつくる。だから、スター養成所みたいな華やかなスポーツですからマナー、それからバレエもそうですね、英会話もそうです。要するに、スターになるための学校に通わせる。ロシアもそうなんでしょうけれども、３代に遡って、ロシアなんかは太らない体質かどうか全部調べて、スケート学校に入れるというぐらいですから。そうやってカタリーナ・ビットって名前を呼ばれると、みんな国の言葉で「イェス」とか「ウィ」とかいろいろ返事して、会釈しながら出てきて、こうご挨拶して、ドローして、スマイルスマイルって帰っていかれるでしょう。

うちはほら、大須の元気な少年少女ですから、「伊藤みどり」って呼ばれたら、学校みたいに「はいっ」て言うんです。そうすると、外国人はその「はいっ」て元気いい声で、もう場内がワーっと笑い。笑いって変な意味じゃないですけど、会場が湧く。それで、タタタっと上がっていって、それで、私たちは会釈ではなく深々とお辞儀をするように教えてありますので、またここで笑い。ドローすると、滑走順が早かったら「いやー、先生どこ。私、滑走順早いの引いちゃった」。遅いの引いたら、「やったあ！」みたいなのがあるでしょう。また、みんなに笑われ、スタスタと帰って行くでしょう。

新聞社とかテレビ局の方が終わったあと、滑走順はどうだったか。自分の相手、気にしている人がどうなんだろうかっていうのを聞きに来ますよね。その時に、来て「先生、もう最初から負けてるじゃないですか。あれはないですよ」って、ものすごく私、言われたんです。私にしてみたら、「大須で一生懸命頑張って、日本人がここに来てるのになんで？」みたいな、「そんな、うちはそういう選手をつくっているんじゃないの！」みたいに思ってたんですけど。

カルガリーオリンピックのときに、フィギュア

スケートというのは演技が終わって、ご挨拶して、キッスアンドクライっていって、あの花のかかっているところで得点ボードを眺める。コーチと二人で喜びのキッスをするかクライ、泣くかという、キッスアンドクライというんですけどね。そこに行って得点ボードを眺めるまでが、一つのストーリーになっているじゃないですか、ね。

なのに彼女は、演技の途中、もう最後のジャンプ、ノーミスでできたというと「イエー」って、うちレディの選手なんですけど、みどりちゃんは「イヤー」とやりながら終わった。そうしたら、昔の人が「先生、それはないんじゃないですか」って、それも言われました。

ところが、次のアルベールビルぐらいの時かな。結局、彼女が「イヤーッ」てやったら、あれがよかったって、どうなっちゃったのっていうぐらい。

だから、そんなふうで、まあみどりちゃんというのは、そういう天才少女でした。でも、うーん。天才というのはね、個性が強くて難しいです。小学校から、うちに引き取り、一緒に生活したんですけれども、やっぱりよその子を育てるというのは、非常に難しいですね。私、自分の娘も同い年の子がいるんですけど。一人っ子だったので一緒にいましたけれども。皆さんは、「先生は好きで引き取っていいですよ。ご主人とお嬢さんが可哀そう」って言うんです。

逆でうちは。私が一番イライラしてたかな。娘は一人っ子ですからおっとりしてて、どちらかというと平気で、電話が鳴っても、みどりがピシッと「もしもし」って出て、「美樹ちゃん（娘）、さっさと出てよ！」って言っていつも怒っていましたし。どこかに遊びに行くよといって、主人が車の中にいると、さっと助手席に乗るのはみどり、美樹子はいつも後ろ。私が、「たまには代わってやりなよ」と言うんですけど、そうすると、主人が「そんなもの、美樹子も自分で乗りたかったら早く出てくればいい」っていうふうに言って、私がやっぱりできの悪い娘ほど気になるというやつでしょうか。私はやっぱり。主人はそういうタイプですし、それから、「最初から、そんなこと分かってたじゃないか。だったら、引き取るんじゃなかっただろう」というふうに言われまして、逆に私ひとりがイライラしていたかな。

だから、まあ家出もしましたしね。「先生がやらせたいんでしょう。今から私は自動車にはねられて足を切断したら、先生はスケート諦めるでしょう」とか、よく言ってました。でも、最後の方は、もうね。青春、いろいろ学校行けばいろんな男の子の話も出るでしょうしね、みんな。でもう最後の方はオフになると、辞めたい。オフはまだいいか、シーズンになった方がやっぱり練習のプレッシャー。アルベールビルの前なんかは、皆さんご存知ないけど、本当に出たくなくて、スケート辞めるって言って、連盟の方が東京から何回も説得に来られて。

というのは、今でこそ、いっぱい選手が日本にいますけど、みどりが出なかったら日本、困っちゃうんですよ。だけど、プレッシャーなんでしょうかね。今から考えると、私も我がことで夢中でしたから分からなかったですけれども、リンクのところまで行くと戻ってきちゃうんです。やはりどうしても練習したくない。

平林　ああ。学校でいうと、不登校みたいな。

山田　そうですそうです。うん。やらなきゃいけないことは、分かっているんだけれども、元気も出ないですし、だから、どこか海外にあと1カ月出せば違う環境で、また違う雰囲気でやれるんじゃないかとか。みんなが、「せっかく、まっちゃん（満知子）と二人で今まで二人三脚でやってきたのに、今更ないだろう」という、まあいろいろありましたね。アルベールビルが、これが最後と思って、私ももう。みどりも、一時、辞めたい辞めたいというのを言っていましたのでね。

でも、試合終わって帰ってくると、やっぱりすごい華やかな感じだから、また1年やるというふうに

いつも言うんですよ。それで、アルベールビルのときも、もう最後と思って行ったのに、終わってきたらまたやりたいと言って。私がもうだめといって辞めさせたんですけど、また一度、復帰しましたよね、彼女は辞めてから。それが伊藤みどりかな。

次、真央ちゃんね。もうえらい違い。真央ちゃんといったら、皆さん、もうすごい顔も小さくて手足も長くて、私はいつも妖精とかエンジェルというふうに呼んでいるんですけれども。みどりちゃんはジャンプ力とか、力は強いんですけれども、柔軟性が欠けていたからよく骨折もしましたし、真央ちゃんはほどほど体も柔らかい、容姿端麗、ジャンプもそれほど低くはない。もう本当にフィギュアスケートに一番必要なものを持っている。ラッキーって、私は本当に、真央と会ったときにはすごく「この子は絶対、世界チャンピオンになる」という雰囲気がありましたね。

平林　非の打ちどころがなかった。

山田　そうですね。黙ってていても、みどりは「イヤー」と言うでしょう。お母さん、去年３月だったか亡くなられたじゃないですか。でも、お葬式済んだのを待って、すぐ練習に来ていましたし、何も変わらない。私なんかもう、私だったら絶対練習……。あんなに、ママと二人で二人三脚ですごかったんです。誰も受け付けないぐらいステージママでしたし。でも、真央の性格って判を押したような毎日。大きな喜びもないかもしれない、大きな悲しみもないかもしれない、本当にそういうふうに見えるんですよ。

平林　感情をあまり前に出さない。

山田　うーん、どうなんでしょう。だから、真面目というか、私たちもロシアの先生についていた時分に、先生が「恋人でもつくったらいい」と、そうすると、色艶も出るしね。もう少しそういうこともしたらどうだということを言うんですけれども。おねえちゃんの方は大丈夫、遊びます。でも、真央は、おねえちゃんと昨日も栄行ったのでショッピングしてきたとか、「楽しかった」と。「何が楽しい？　先生」って聞くんですよ。だからね、楽しみ方を知らない。リンクで練習しているときが、一番落ち着くんだって。

うちの佳菜子に、少しでも、本当にいつも真似してほしい。佳菜子なんかすぐにふわーっと飛んでいっちゃいますから、うちの村上佳菜子は。真央は本当にそういうタイプですね。だから、試合に一番強いかもしれない。打たれても強いですし、あまり感じがないので、私たちが言っても、言うこと聞かないかもしれない。逆にいったら反抗もしない。

だから、佐藤信夫先生が今、教えていらっしゃるトリプルアクセルもきっと信夫先生は、あまり完成してないのでね、もう絶対、入れるべきじゃないということは、もうよく分かっていると思うんですよ。だけれども、真央が聞かないと思います。だから、一苦労する。逆に黙っているけど、「いえ、やります」と言っているんだと思うの。それが真央ちゃんです。

平林　あまり感情の起伏がなく。

山田　うーん。起伏がないというか、私は雲の上。一般の地上にいる私たちとは、ちょっと違う人種かなと思っていますけれども。でも、あこがれる存在ですね。スター性はありますよね。すごく。

平林　オーラというのはよくありますね。

山田　すごくいい子ですよ、はい。

今の村上佳菜子、彼女はそのへんに転がっている、佳菜ちゃんという感じです。まあ私にとっては、今、お話で、何年といわれましたけれども、今、69歳。来年70になってしまうんですけれども、孫ですよね、佳菜子は。

平林　いえ、とてもそうは見えません。

山田　いやいやいや。みどりに言わせると、「先生、優しくなった。あれではいい選手、出ないわ」というふうに言われちゃうんですけれども。やっぱり年とって丸くなったというのもありますし、みどりのときには初めての選手というか、いい選手。もちろんそれまでにもつくっていました。全日本級は。

だけど、世界のテレビに出るような一流のコーチ。そんなコーチと戦っていかなければいけないというので、もうやっぱり必死でしたし、若いからもう分からないでがむしゃらに進んでいた。

でも、今は要領よくなりまして、「これは無駄じゃないかな」というのをよく分かって割に。逆に言ったら、学校の勉強でいったらすっと教えてしまって、余分なことを聞かれたら分からないという。ちょっと枝葉のことを言ったら、これはストレート

という感じがあるかもしれないですけれども。

佳菜子は皆さん、画面でも見ても分かると思いますが、今、高校３年生にもうなりましたけれども、年齢的には幼稚園児かなと思うぐらい、幼いですね。一つのこと、真央も幼いですし、まあみどりはちょっと違うかもしれないですけれども、みんな小塚君もそうですし、高橋大ちゃんもそうですが、年齢にしては遊んでないものですから。みんな素直でまっすぐですから、年齢よりは随分、幼いというタイプが多いですね。

これが、今、聞いていただいた伊藤みどり、浅田真央、佳菜子、全く違うタイプですね。たぶん、それが画面を通じても、皆さんに分かっていただいているんじゃないかなというふうに思います。

３　コーチとしての教え方のモットー

平林　本当に三者三様の、頷ける部分が多かったのですが。それで、先生の今のお話の途中にもあったんですが、そして、またこれが、私が教師として一番知りたいことなんですが。先生がコーチとして、選手を育てる際の基本的な指導論というか、教え方のモットー、そのへんをちょっと伺いたいです。

山田　私も７歳からスケートをやっていたんですけれども、私の父親はもう亡くなりました、当然。明治生まれで、今のようなマイホームパパというわけではなくて、もう恐い。「親父は親父」という存在ですよね。その親父が、私は４人兄弟の末っ子なんですけど、兄たちは国立へ行った。要するに、「これからの時代は学業がものを言う時代。一獲千金は無理だから、学校を国立教育大附属、附小附中、旭、名大」という、兄たちはみんな、姉もそうなんですよ。でも、姉は一応、バイオリンをやってたんですけれども、私だけが末っ子で、父がまあどうでもいいというふうに好きにこう。自分のやりたいというか、人形みたいなものだったんですよね、きっと。で、フィギュアスケートというのを。

フィギュアスケートをやらせたかったのではなくて、もともとはバイオリニストにさせたかったみたいなんですけれども。そうしたら、そんな小さい子は無理と。今でこそ小さい子いっぱい、英才教育であるでしょうけれども、昔、そのころはとても無理、無理と言われて、それで結局、ちょうどそこに満州から引き上げてきた方がいらっしゃって、戦後、スケート場。戦前はどこかにあったんですけど、なくなって、戦後。「また、今にスケート場ができると思うよ。こんな小さい時からスケートやらせたらいいよ。それまでバレエをやりなさい」と言って、私、クラシックバレエをずっと習ってたんですね。もともとはね。今もバレエやっている子たちは多いですけれども、体操とかバレエが必要ですからね。

バレエやってて、今池に小さいリンクができたんですよ。今、30×60が正規のリンクなんですけど、半分もっと小さいかな。そこでスケートを始めることになったんです。明治生まれの父親ですから、楽しくない。

今みたいに、私たちのようなプロのコーチがいないんですよ。みんなお仕事があって、夜終わってから趣味で教えに来るんです。もうなんというのかな、小難しい、なんとかでどうのこうのって、聞いていても眠くなっちゃうし、楽しくない。スケートを好きじゃなかったんですよ、自分が。だから、早く辞めたい、早く辞めたい。でも、辞めたいって言ったら親父に追い出されるんじゃないかと思いながら、言えず。

大学生になるときに、やっぱり今、６大学とか、スポーツで引っ張っていただけるところがあってね。東京へ出てこないかって。父は、もう名古屋にいたらこれで終わりかなあって、やっぱり東京に出した方がいいんじゃないかというのがあったみたいなんですけど、母は……。今は、働く女の人がいっぱいだけど、「女の子を東京に出したら、ろくな女の子にならない。絶対駄目。お嫁にいって子どもを産んで、それが女の子の幸せ」ということで、私

はもともとスケートが好きじゃないですから、「ラッキー、もう名古屋に残ってスケート辞めたい」と思って。

高校３年で、私、辞めてるんですよ。でも、みんな東京へ出ちゃったので、国体なんかに出る愛知県代表がいなくて、出させられたりはしていましたけれども、もう本当に現役は高校で辞めて、それから連盟のお手伝いで、試合のときに曲をかけたり、何かしているうちに「うちの子、ちょっと見てもらえないか」って。まあ若いですから、お母さん方にしたら、おじさんに習うよりは若い人に習った方がいいというので引きずり出されて、それで見ているうちに、最初はセミプロみたいな形で始めたんです。

だから、結婚したら辞めたいな。でも、私に代わる先生がなくて、でも、子どもができたらおなかが大きいです。今の先生は本当に産み月まで働いていて、産んだらすぐにリンクにでも出ていらっしゃる。だけど、私のときには、もう子どもができたと分かったときに、やめやめって「これでスケート辞める」って言ったんですけど。また保護者に「先生、赤ちゃんだっこしているから、ちょっとだけ教えにきてくれないか」というのでやっているうちに出会ったのが、みどりですよ。で、辞められなくなって、ずっと来てしまったんです。

だから、もともとは、先ほど普及部と言いましたけれども、あまり一流の選手を育てるという気持ちはなくて、みんなと楽しくやっていきたいなというふうに、これが一番の私の気持ちかな。

あとはコーチとしては何かなというと、今、お話しているときもそうなんですけれども、先生によっては、これは校長先生の集まりなのでちょっと違うかもしれないですけれども。スケートの先生も練習していると、「今の駄目だよ、もう一回。ほら、膝が出てないだろ、もっと膝出して」とか、「肩が入ってないだろう」とか説明してやっている先生もいるんですよね。だけど、私の場合は、「いやあ！今のよかったあ」みたいな感じ。駄目だったら、「だってさ、肩が入ってないじゃない！」とか。身振り手振りじゃないですけど、やっぱり先生が一番その気になって、自分もジャンプ跳んでるぞみたいな。それから、こんな風にしなきゃ駄目でしょうみたいな気になっていないと。理屈、表面上の話をしてみても、それは子どもたち、私は小さい子どもたちが多いですから、教えるのは大人相手じゃないですから、子どもの食いつきが悪いというんですか。

もっともっと寄ってきてほしい。先生と一緒になって頑張ってほしいと思うには、まず先生が頑張らないとね。自分が英語？アクセントってあるじゃないですか。「Oh」とかね、外国人が、日本人の英語の担当の先生もいらっしゃるかもしれないですが、お経を読んでいるように聞こえるっていうんですよ。何か私たちが韓国に行くと「ウンケンチン」って怒っているように聞こえるでしょう。それと一緒で、意外に私、「何か怒ってる？」みたいな感じぐらい。やっぱりもっと抑揚があって、身振りがあってというと、聞きやすいですし、子どもたちも入っていきやすいと思いますので、私としては自分でできるだけ、身振り手振りをつけて話すようにしています。それから、その子たちと一緒になること。それが一番です。

それと、身なり。もちろんいいものは着たいです。でも、お金もかかります。例えば私たちスケート練習するときに手袋をします。でも、穴のあいた手袋。穴を塞いでいただいたりしたら、だいぶ違うんですよね。たとえば、ジーンズを履いてとか、エプロンをして、チャチャっと出かけていく。そのへんのサンダルをはいて出かけるときと、ちょっとおしゃれして行きましょうと思って歩くときって、何か姿勢違いません？ちょっとウキウキもしますし、こうスタイルよくしようとかって。

だから、やっぱり練習のときも、きれいに洗ってあげて、汚れてないようにとか、お母様方にお願いしています。それから、靴も、スケート靴に履き替

えるとき、靴は置いて、椅子の下にきちっと並べて置いていけばシャキッとします。でも、シャーッと脱いでシャーッと練習と思いますので、決して「挨拶をきちっと」とか、「はい」とかって、そういうのは私は言いませんけれども。でも、そういう細かいところで、何か自分がシャキッとしたり、やる気になったりしたら、私たちもいいオーラを出してあげられるかなと思います。

あと、嘘はいけません。嘘はいけませんというのは、偉そうなことを言ったりね。何かしていても、子どもってすぐに見破るでしょう？だから、「素直な心が才能を伸ばす」。子どもも、私たちも、本当に自分がきちっとして、悪いときは悪い。今日はどうかなあというのを、ちゃんとして子どもたちと接していきたいなというふうに思っています。

それには、やっぱりいつも「先生駄目なの、駄目なの」では駄目でしょう。だから、いつもクリーンでいたい。心がまっすぐでいたいな。だから、いろんなね。私、年齢さっき言いましたけど、お母さんが娘みたいな年齢。娘も44ですからね。私、下手したら同級生が50近い娘がいますのでね。そうすると、そういうパワー、そこからのパワー、それから、孫みたいな人たちからのパワー。

昔がよかったという人にはなりたくない。今、最高。だから、よく話すんですけれども、いくつに戻りたいかといったときに、中学１年の基礎からやりたいとか、二十ぐらいの青春時代に戻って、もう一回、新しい恋人を見つけたいとか、いろいろあるじゃないですか。でも、私はあまり戻りたくないのね。うん。というのはね。本当にいい人生、生かさせてもらって、いろんな人と、いい巡り合いをして今があって、もう一回、人生やり直したら、こんな幸せは来ないかもしれない。

平林　やはり私から見ても、先生はすばらしい年の重ね方されているというか、いい経験を積まれてね。

山田　でもね、でもね。うちの選手のお父さんが一人ね。「いや、先生、いっぱい苦労していらっしゃるじゃないですか。でも、先生はそういうの出されない」と言われたときがあったの。だからね、してたかなとは思うんですけれど、でも、「俺はこんなに残業もしたのに、みんな人はついてこない」というよりも、自分に何かいいところを見つけて、残業しても人がついてこないというよりも、「あ、あの人は、この間お茶を出してくれたなあ」とか、何かいいことを自分で見つける。悪いこと、悪いことじゃなくて、プラス思考にものを考えていけば明るくもなるしね。

過去がこうで、「まあ去年はよかったのに」じゃなくて、いつもクリーンで前向いていけば、必ず私たちには人がついてきてくれるし、いつか分かってくれる。そのときは、たとえば敵ができても、いつかきっと私のよさを分かってくれて、愛してくれるんじゃないかな。選手たちも、山田先生、大好き。いつも私は「愛してる」という言葉を言うんですけど。「好き」じゃなくてね、「愛してる」というのを、だから、愛される人間になりたい。それには、素直でいたい。つくっていたのでは、子どもも親も、すべてが離れていってしまう。

やっぱり自分をいつもいつも磨いて、みんなからの、いろんなものを吸収していきたいなというふうに。

平林　愛しているというのは、本当に魅力的な言葉ですね。

山田　ありがとうございます。

平林　私も一度、先生から言っていただきたいと思います。

山田　ああ、言わないと思います。（笑）

平林　でも、先生の前向きな、そして素直な生き方が、今日の先生をつくっているんですよね、きっと。

山田　ああ。あの、若くみえるでしょう？　70には見えないって、みんなおっしゃってくださるんですよ。

平林　本当に。僕、時々、嘘つきって言われるんですけど、それは置いといて、本当に若く見えます。

山田　いやもう、中は腐っているんですよ。やっぱり何十年も生きてくるとね、いろんなところが、腐ってきているんですけど。でも、自分で輝いていたいと思うわけじゃないけど、いつもいつもこうしていると、エネルギーって湧いてくるんですよ。うん。だから、皆さんも頑張りましょうね。

4　今後の自分の人生

平林　そんな輝いて見える先生に、最後に、この質問をしたいんですけど。先生、ご自身の今後の人生。まだまだ輝き続けていただきたいんですけど、どのように考えておられますか？

山田　ああ。最近、でもね。この前も誰？芸能人か何かで69とか71とかで亡くなった方、いましたよね。新聞なんか見ると、83とか書いてあって、そうすると、早かったねと言わないで、みんな普通にこう、新聞で亡くなったりするのを見ているというと、「あと10年ちょい？」と思うと、ものすごい悲しくなっちゃうんだけれど。

だから、やりたいことやりたいなと自分は思っていて、やりたいことって何かなと思うと、孫と一緒に楽しくしたいなと、いつも思っているのね。今、うちの孫は横浜に住んでいるんです。ちっちゃいときはよく来てくれましたけど、だんだん自分たちのことが忙しいので来てくれませんので、私は自分で休みを適当につくりながら、１カ月に１回は会いに行っています。こちらから。向こうはきっと迷惑しているかもしれないけれども、本当、そういうものが、一番の趣味なんです。

でも、みんなは、「先生は死ぬまでスケートだと思う」って言うのね。「リンクで倒れるよ、きっと」って言うんです。いやそれはしたくないと思っているんですけど。たぶん、「だって先生はスケート趣味でしょう」って言われるの。趣味のように見られちゃってるんですよ。私はすごい嫌な仕事、「また今日も仕事か」と思ってるんですけど、みんなは好きでしょうがないお仕事と思っているみたいで。

平林　いや、私もそう思いますよ。

山田　ええ？　嫌ですよ。だけどたぶん、このお仕事が合ってるんじゃないでしょうか。でもね、この仕事というのは、昔はコンパルソリーもあったので、学校に行く前、朝６時から練習。というのは、一般営業のリンクを利用している場合が多いですから。そうすると、お客さんが入っていない前、それから営業が終わってから、昔は８時に営業が終わった。今、６時ですけど。でも、それから貸切。今でも11時まで、下手すると12時過ぎまで。

だから、子どもたちにいつも「放課に宿題やってらっしゃいよ」というのが、私の言葉。だって、学校行くまでリンクで滑ってて、帰って来たら、そのまますぐにリンク。それで、うちに帰ったら、もう遅いからお風呂に入って寝るしかないんですよ、ね。そうしたらもう、学校でなんとかしてくるしかない。だから、もう本当に子どもたちも時間がなくって。なんでしたっけ。何を話してたんですか、私は。

平林　先生のこれからの輝く人生について。

山田　あ、そうそうそう。だからね、もう人生の中で、うーん。そうだね……、あとどうやって生きるかといったら、やっぱりスケートなのかな。

平林　お孫さんが１番で、２番めがスケートということですか。

山田　うーん……、どうかなあ。今、そう言いました？　うーん、でもね。今、辞めてないから２番スケートですねと言われると、「いや、２番じゃ駄目だよ」というのがあるので、うーん、どっちかなあ。

平林　もう少し突っ込んで、私なんかからみると、スケートでもうやり残したことはないんじゃないかなと思うんですが、先生ご自身はスケートに関して、まだ、このことがやり残してということはおありになるんですか。

山田　いや、やり残しているかどうか分からないけど、毎日、「明日こうしたいな」とか、本当に遠い将来、こういう選手をというのは全くないんですよ。「明日、こういうところを直さなきゃ」とか、「明日、こうしたいな」というので、もう毎日過ごしているかな。

平林　ああ、それの積み重ねなんですね。

山田　ですね。そうそう、スケートって朝早くて夜、遅いでしょう。でね。離婚したりね、一人でいる人が多いです。このお仕事というのは。きちっと家庭持っている人が、芸能界みたいな、水商売みたいなもので、夜遅く帰ったりね、私。日にちが変わってから夕飯食べたりしているような生活ですから、旦那さんも怒っちゃうんでしょうね。分かりませんけれども。（笑）

昔、若いときに一人でいる人にね。昨日歌舞伎見てきたとか、コンサート行ったと言うと、いいなって思ったんです。結局、それが力になるじゃないですか、勉強できる。私は「明日のお弁当、何作ろう」「スーパー行って買ってこなきゃ」というのでした。そんないい母親、主婦もやってないですけど、そういう人達から見たら自由な時間が少なかったですからね、すごく羨ましく思ってて、一人男の方で離婚された先生からは、「まっちゃん、いいよな。幸せで。だから、いい仕事ができるんだよ」って言われたことがあるんですよ。「はあ？」と思ったときに、その人は離婚されたばっかりだったんですけど。たとえば子どもが病気がちの子どもがいたりしたら、やっぱりいいお仕事できないでしょう。それから、旦那も浮気したことはたぶんあるとは思うんですけど、でも、旦那が、かけごとに夢中とか、そんないい加減な人であったりしたら、やっぱりそっちのほうが心配で、お仕事も身が入らないかもしれない。やっぱりそうやって考えると、家庭があってのお仕事じゃないかなといつも思うんですよね。

やはり家庭を犠牲にまでは、私はそこまでの度胸はないですね。やっぱり家庭、その根本が幸せでいたいというふうに。うちの主人も、ニューヨーク大学の方に行っていまして、お仕事も海外営業があって、海外勤務が多かったですから、割に「おい、靴下はかせろ」とか、「おお」とかというタイプではなくて、一人遊びができるというか自立できる男なんですよ。だから、私が逆に帰りを待ってて、どうのこうのって言われるよりは、「お前はお前、俺は俺」というふうなのが楽な人ね。だから、お互いにいい相手同士で。向こうはどう思っているかどうか分かりませんけれども。

平林　では、お互いにいいパートナーに巡り会えたわけですね。

山田　いや、娘だけがちょっと理想と外れてるんですけど。でも、孫はいいです。娘はもうちょっとステキに生きる筈だったんですけれども、失敗作でしたね、あれは。というと、怒るかもしれませんけど、でも、娘たちの家庭も、すごくお婿さんも大好きですし、孫はもうかわいくてかわいくて、かわいくてしょうがないし、だから、本当に幸せです。はい。

平林　とてもうらやましいです。

山田　さっき言ったように、皆さんも、「もう一回、戻りたかったらどこに戻りたい」という人生じゃなく、精一杯頑張って楽しく生きてほしいと思います。

5　会場よりの質問に答えて

平林　さて、ここで、私だけが山田先生を一人占めしていても何ですので、せっかくたくさんの校長先生方がおみえです。山田先生、今までのお話で分かっていただけたように、おそらくどんな質問でも答えていただけると思いますので、質問のある先生、元気よく。

山田　あの、「アクセルはどういうジャンプですか」とかね。「真央ちゃんには彼氏はどうでしょうか」とか、何でもいいです。先ほどの質問はなんの質問でも。それから、先ほど話したように、ストレートで素直で、元気でいなきゃいけないということは、こうやって聞いてないで「はぁいっ！」て、先生よろしくお願いします。

平林　どうもフォローありがとうございます。すごいお許しが出ましたので、いかがでしょうか。

山田　サンキュー

平林　では、元気よく。

男性　失礼します。お話、ありがとうございました。もし、今、高校生の山田満知子が、あるいはもうちょっと前の、中学生ぐらいの山田満知子が、先生のもとに習いに来たとしたら、どんなふうにその子を教えていますか？

山田　今、習いに来るんですか。今、高校生が私のところに。

男性　いや、もっと前でもいいです。小学生の山田満知子でもいいです。

山田　ああ、うちは幼稚園か、低学年の子たちが習いに来ますので、高校生の今、女の子たちとか中学生というと、もう何年も私が付き合った子たちになってしまうので、ちょっと初めてではなくなってしまうんですけど。ちっちゃい子どもが、私のところに来たときですか？

男性　山田満知子さんです。小さい先生が、先生のところに来た。

山田　私が小さい子で、コーチの山田満知子のところに習いに来るの？来たのときの私の気持ち？ということですか？

男性　今の山田コーチとして、幼いときの山田満知子が、自分のところに習いに来たとしたら、どんなふうにその才能を伸ばすのかなと思いました。

山田　あ、才能を伸ばすことですか。ああ、私、あまり才能を伸ばそうというのじゃないものですから、お友達に、まずなりたいというふうに、私のほうですよ。コーチの方としては、小さい子が習いに来ると、まずその子と仲良くなりたいなというのがあります。

平林　先生のモットーは、やはり子どもの気持ちに寄り添ってというとところがありますね。

山田　そうですね。だから、まずはお友達。それで、だいたい今の子たちっていうのは敬語が使えない。校長室にでも平気で入って行ったり、職員室も。昔は私たち職員室というと、「うー」という感じでしたけど、たぶんあまり先生に対してそういうのがないんじゃないでしょうか。敬語がなくて「先生、知ってる？」または、「知っとる？」みたいな。たとえばそういう話、「知ってますか」というふうに、私はいつも言い直す。

　私も教えるときには、きちっとした言葉で、割に「駄目じゃないの？」とか、「駄目じゃん」とかじゃないですよ。遊んでいるときはそうですけれども、指導しているときは。だから、今、新しい子どもたちが入ってきて言うことというと、何が多いかなというと、たぶん「もうちょっときちっとしよう」「ほら、顔を上げて」とか、それから、言葉が多いかな。ちっちゃい声で聞こえないような声で話す子たちとか、お母さんの陰に隠れていたりとか。だから、それが多いですかね。

　まあ多いというと、うちは母親たちが毎日ついてきますので、親への注意のほうが多いですね。子どもよりは親ができてない。

平林　関連して僕の方からちょっと。

山田　いいですか、そんなふうで。質問と違いました？　答えは。

男性　私としては、幼いころの山田満知子先生の姿勢がちゃんとしてたのかな、それから素直だったのかなって。

山田　私は全然してないです。全然してないですよ、はい。

男性　それを、今の山田コーチが見たら、どういうふうに指導するのかなと思ったものですから。

山田　ああ。私だけじゃないですが時代でしょうかね。たぶん今の子どもたちよりは、もう少し、親たちに対しても怖かったりとか、こんなに裕福じゃない、貧しい日本でしたからね。時代が違いますのでね。でも、似たり寄ったりじゃないですか。子どもなんていうのは、そんなにできた子どもはいないと思いますし、私はできてません。はい。

男性　小さいころの先生はタイプでいうと、伊藤みどりさんタイプだったのか、浅田真央さんタイプだったのか、村上佳菜子さんタイプだったのか、たとえていうならば。

山田　佳菜子です。佳菜子。私、先ほども言いましたように、４人兄弟の末っ子で、ちょっと年も離れているんですよ。「もう満知子ならしょうがないな」って、兄たちも姉たちも、みんなにこう、放っておかれてるわけじゃないけど、末っ子って世渡り上手なんですよ。兄たちに「ねえねえ、これ宿題やって」とか、上手でね。だから、タイプでいうと佳菜子かもしれませんね。みどりのように勝気でキッていう、やはり私もコーチですから負けたくない気持ちがないわけではないですけど、みどりのように強くはないですね。それで、真央のようにこの世の離れたところから、ふーっとこう……、というタイプじゃないですね。本当に一般人、私は。

私を自分でね。「そんな、普通の人と変わらないでしょう？」と言うと、保護者から「十分変わってます」って言われるんですけど、自分では、全くみんなと変わらないつもりでいますので、まあ佳菜子でしょうかね。まあ、それとみんなと一緒でいたいという気持ちもありますから、特別な人でありたくないというのは、70でいたいとは思いませんけれども、普通のおばさんでいたいというのはありますので、佳菜子だと思います。タイプ的には。

男性　はい、ありがとうございます。

平林　それでは、次の質問をお受けしたいと思いますが、続けていかがでしょうか。はい。では、そこの女性の方。

女性　お話、ありがとうございます。山田先生ご自身も、たくさんの方と巡り合い、いろいろなことを教えていただいて今に至っていると思いますが。先生の心に残る恩師、教師ですね。どんな方がおられたのでしょうか。

山田　よくね、この性格は何かの本のこの言葉で作り上げられたとか、それからやっぱり同じような質問、新聞社とか雑誌の取材なんかで受けるんですが、……あまりないんだよね、うーん。強いて言えば中学の担任が、割にクラスのグループというのものをすごく大事に思われて、みんなで季刊誌を作ったりしたのも、きっかけかなあと思います。大嫌いだった父親が強かったかもしれません。やはり基本的には真面目で、私は今、スケートを教えておりますけど、勉強のできるできないというのは自由だけど、学校はすごく大事というふうに、いつも親さんたちに言っています。もう結局、今、早引きをしないとリンクが練習できないような状況が多いんですよね。でも、同じような年齢の子どもが固まっている場所にいて、同じような生き方。同じようなというか、中学生は中学生らしくというのが、私、いつも思っています。高校生は高校生らしく。

大学生になったら、私たちの時代だったらマニキュアをしてもいいよって、ハイヒールも。今、高校でもしていますけれども、時代が変わりましたが。でも、その年代に合った生き方をしてほしいなとか、というのは私は考えています。

個性もそうですけど、その子らしいスケートをしてほしいと思います。たとえば、勝気だったら勝気が前に出たっていいじゃないですか、その子の個

性で。やはり個性じゃない弱い部分は勉強しなきゃいけないですけれども、個性も大いに利用したらいいと思います。

基本的には今、誰のというと、本当に生きていく上で、いろんなことを学んでいって、自分で理想は父親が理想というか、考え方の根底はそこにあったと思うんです。それが大きく増えていったかなというか。やっぱり自分はこうありたいなというのに近づいて、近づいてはいけないけれど、やっぱりわがままなので、「こう生きたい」というとおり生きています。

ごめんなさいね、きっと誰かの言葉とか、「はい、中学の校長です」と言ってあげられるといいんだけど、ない。

女性　ありがとうございました。とてもステキです。

山田　ありがとうございます。

平林　では、他の方。まず、そちらの後ろの方。こちらの方、しばらくお待ちください。

男性　お願いします。私もアイススケートが大好きで、私は一宮の出身です。一宮には福祉センターというところがあって、その地下に高校時代毎日通っていまして、きょうは先生の話を聞けて、とても幸せに思います。大学生時代はアイスホッケーをやっていましたが、スケートにはずっと興味があって、私も大学時代に小学生の子どもスケート教室を５日間ぐらい教えたことがあったんですが、それがきっかけで私は教員になったという、教えることが好きで、教えることの素晴らしさを感じて教員になりましたが。

愛知は、ここには他県の先生方もみえるんですが、スケート王国というか、先生のおかげで、いい選手がたくさん生まれていると言われています。ある新聞で読んだんですけれども、なぜ、愛知県の子どもたちの中に優秀な選手が多いかという、その一つに、先生の力も当然あると書いてあったんですが、もう一つ、スケート場へ送り迎えしている親さんの影響が強いんだと。愛知県の親さんは、普通は送ってきたらまた、さっき東京のお母さんがその間、珈琲を飲んでいるという話がありましたが、結構、子どもの練習を見ているお母さんが多い。見ていて、子どもと一緒に、うまくいったときや、うまくいかないときに、親も一緒に感動しているというのか、声かけているという。それが、愛知のいい選手を支える力になっているんだという記事を読みました。

我々も今、親の対応で、子どもだけではなかなか育たないと。お母さん、保護者も含めて育てていかなければいけないと思うんですが。先生、先ほどちらっと、お母さんにも指導することがありますよとお話をされたんですが、先生は教えてみえるお母さん方にどんなふうに接してみえるのか。その親さん、愛知だけではないと思うんですけれども、親がどう関わると子どもたちがうまく育つのかというポイントがあれば教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

山田　はい。よくやっぱりスケートをご存知でね。本当にね、愛知が強いのは、たぶん親さんだと思うんですね。まあそれだけではないでしょうけれども。でも、どうしてかというと、普通たとえば、野球はどうか知らない、柔道もどうか知らないですが。そこへ親さんが連れて行かれると、たとえばスケート場だとしたら海外でもそうですけど。リンクサイドではなくて２階の観覧席で待っててもらうとか、観覧席から見るとか、そういう形が多いですね。多いというか、教えにくいの。でも、うちのリンクだとすると、リンクの前にワーっと保護者がいるんですよ。貸切リンク、終わったあとの練習時間も、うちの保護者はダラダラっと１列に並んでいますよ、ここに。すると、子どもたちって、ジャンプ跳んで失敗しても、私の顔よりママの顔見てる。ママが教えてます。

時々、プレスの人たちが私の取材に来たりすると、「先生、あの方、コーチですか？」っていう

のね。「いやいや」、「でも、先生と同じ格好して教えてらっしゃいますね」。ものすごいツーですからね、毎日来ていますので。それが嫌でというか、口出しする？要するに保護者が来ると、あの子の方がレッスンが３分長かったとか、うちの子がどうだとか、親さんが。

だから、だいたい練習場には保護者を入れないというところが多いと思います。どんな競技でも、どんなリンクでも、まあ見ていただくのは結構です。見ていただくのは２階とか、そういうところです。だけど、私の場合は先ほど言いましたように、うまいことできてるんです。末っ子で、何でも自分で一人でできるタイプじゃなくて「ねえねえ、どうする？」みたいな甘ったれなものですから、保護者がちょうどいい学校なんですよ。

だから、保護者がいつもいてくれることが助けになったり、それは時にはうっとおしいときの方が多いですよ。多いけれども、一人で頑張るよりは、大勢の力の方が絶対的にいい。だから、嫌なこともあって、いろいろうるさいことを言われたり、先ほど保護者を教育するのが、子どもより大変って言いましたけれど、本当に大変なんですけれども。でも、我が子と思えば、これもお母さんと思ったり、私が若いときは私のお母さんの年ですよね。私より向こうが上から目線ですからね、全部。注意されることが。

だけど、やっぱり一人で頑張っているよりは、いろんな人が、「あ、こんな考え方もあるんだ」と。私、最近、思うのは「この人の教育って最低」って思うけど、この人にもきっと友達いるんだろうなと思うと、「きっとこの人にもいいところあるんだ」ってね。きっと、だからそこを見習わなきゃというふうに思うでしょう？だから、いっぱいとるところってあるんですよ。「こうしていても、こういうことね。ああ、なるほどなるほど」という。

だから、私は唯一きっと、発祥の地というかどうか分かりませんけど、保護者を入れ込んだというのが強いですね。だから、リンクで、ずっと親さんも毎日見ていると興味が湧く。お家へ帰って、そのかわり子どもたちは、とりあえず車に乗ったら寝たふりをする。お母さんが「さっきのジャンプは、あの子は跳んでたのに！」って、ゴーッて寝たふりをする、もう聞かない。いつももう、子どもたちが言ってる、「絶対、先生。後ろに乗って寝たふりですよ」って言いますけど、ママたちがうるさいうるさい。だから、それと同じ、倍ぐらい私のところにも返ってくるわけですから、保護者が。

でも、興味を持っていただける。そうすれば、子どもだけでやっていると伸び悩んだときに、辞めたいなということがあっても、親がやっぱり後押しをしてくれたり、いろんな意味でサポートもしてもらえたりしますしね。それから、結局、お母さんが熱心であれば、お父さんも力になる。朝早かったり、夜遅いということは、お父さんが他の子どもをご飯食べさせて出さなければいけなかったりとか、夜、帰って来ても寒い日に家の中にお父さんが帰って来てストーブをつけなきゃいけないとか。お母さん、出て行っちゃってるからというのもありますし。

でも、やっぱり家族そろって、スケートのファンになっていただいて、みんなで頑張りましょうというのが私の中にありますので、そういう形をつくったのは、私かなあと思いますね。外国はあまりいないと思います。日本の先生はその形が多くなってきていますね。

平林　上手に先生のサポーターにしていくという。

山田　うーん、サポーターというか、よく私、試合なんか、選手の親と食事したりすると、「選手の親と食事して、嫌じゃない？」って言われるけど、楽しい。私は娘と食べている、身内と食べている雰囲気ですから。周りは保護者と思っているかもしれませんけど、結構、私のところはみんな毎日のことですから仲良くなって、けんかもしていますし、注意もすごくしていますし。「だけど、先生の方が最低ですよ」とか言われることもありますし、「あん

たに言われたくない」って言うんですけど。「私の方が長く生きてる」とか言ってるんですけど、そんなのが強くなったかもしれません。いいでしょうか。はーい。

平林　もうひと方、最後の質問になります。山田満知子先生に質問をした最後の方ということで歴史に残りますので、よろしくお願いします。

男性　きょうは魅力的なお話をたくさんありがとうございます。それでは、最後の質問をさせていただきます。

たくさんの子どもたちを大会に出していると思うんですけれども、なかなか実力どおり、本番で発揮させることは難しいと思います。そこで質問ですけれども、本番に実力をなるべく出せるようにさせるための一言というのか、そういうコツみたいなものが何かあるのかなということと、それから、そうは言いながらも、本番でうまくいかなかった子どもたちに、終わった後にどんな声をかけているのか、それを教えていただきたいなと思います。

テレビなどで、フィギュアスケートの様子を見ていますと、リンクに入っていく直前にコーチが声をかけていたりするのを見たりしますが、どんなことを声かけているのかというようなことを教えていただければと思います。以上です。

山田　先ほどもね、控えのところで女性の校長先生に同じような質問をされたのね。「出て行くとき、先生、テレビで見ていると何か言っていますよね。あれって、いつも決まりの文句があって言っているんですか？」、と聞かれたんですけど。私は全く決まってないですね。信夫先生なんかは、割に決まっているかなという気もしないではないですけど、私はそのときばったり。だから、本当にその子の顔を見て何を言ってあげたいかなというのが湧いてくるんですよ、やっぱり。

日頃、いつも接していて、やはり試合って緊張してるじゃないですか。それから、やたらちょっとハイになりすぎてるなとか、落ち着かせなきゃとか、緊張しすぎているから、ちょっとリラックスさせなきゃとか、やっぱりそのときに自然に言葉って出てくるのね。今、何かいいお言葉、ありますでしょうかって、あったら、私が聞きたいぐらいで、ない。何かあったら、魔法でいい……、普通の精神に戻れるかって、そんな言葉はないし、私も動揺しているし、選手も動揺してる。二人で頑張ろうみたいなことしかないんですよね。だから、その魔法の言葉はないですけれども。

とりあえずいつも、世界選手権でも、全日本でも、いろいろな大会のときに、子どもが笑って、よかったって言って私のところに帰ってきてほしいという願いですね。「１年間、こんなに頑張ったんだもん。神様、何とかして」というのは、そのときだけ神頼みなんですけど。「子どもたちが頑張ったんだから、ちゃんと見守っていてあげて。うまくいくように」というのは思いますね。それぐらいかな。

うまくいかなかったときは、やっぱり可哀そうだと思いますね。お母さんはほとんど怒ってます。帰ってくると「あんなふうな演技で、あんた何やってきたの」と怒っていますけれど、子どもたちは一生懸命、だって試合の時、練習は毎日ですから、たるんでいるときもありますが。必死で結果がそうなのね、やっぱり。だから、やっぱり可哀そうというのは思いますね。うまくいかなかったときは、うん。

だけど、やっぱりそれをはねのけていけるのは練習しかないですね。練習で自信をつけることが一番。もういつもみんなに言ってる、「10回跳んだら12回降りなさい」。10回しか跳んでないのに12回降りられないんですけれども、そのぐらいの確率でなければ、10回跳んで８回降りたのでは２回が出ます。必ず。

だからもう、やっぱり自分で、自信持って前へ。リンクの真ん中に立てるというのは自信しかないです。というのは、毎日の積み重ね、練習しかないですね。だから、あそこに行ってかけてあげる言葉は魔法もないし、そのときに子どもたちを見て、何を子どもたちは私に思って目を見てるのかなというのを見て、とっさに出てくる言葉ってあります。だから、その都度その都度、違いますね。よろしいでしょうか。

平林　時間というのは、まことに残酷なものです。特に夢のような時間、楽しい時間はあっという間に過ぎてしまいました。

山田　ありがとうございます。

平林　先生とのツーショットという名残は尽きませ

んが、以上で、山田満知子先生の記念講演を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

山田　ありがとうございました。

司会　山田満知子先生、平林良也先生、ありがとうございました。このあたりで終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

　それでは、講師の山田満知子先生に感謝の心を込めまして、実行委員会の豊嶋啓子、円上中学校長が花束の贈呈をさせていただきます。

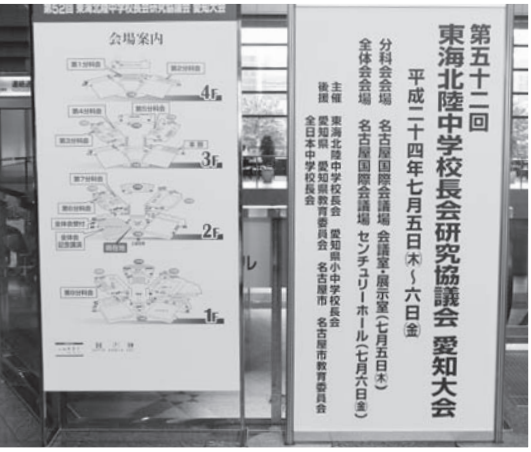
山田　わあ、女性の校長先生！頑張ってください。ありがとうございます。

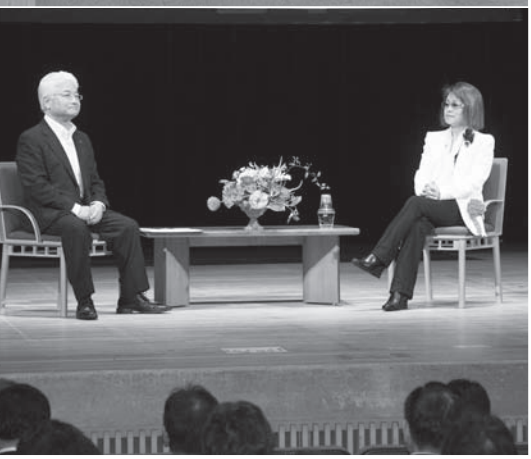
司会　山田先生、本当にありがとうございました。本当に若々しい先生のお話を聞かせていただき、たくさんのファイトと幸せをいただきました。私どもの先生に対する愛情を込めて、いま一度、盛大な拍手でお見送りをさせていただきたいと思います。先生、ありがとうございました。

愛知大会 スナップ

7月5日(木)・6日(金)

名古屋国際会議場
センチュリーホール





第52回東海北陸中学校長会研究協議会愛知大会　宣言・決議

宣　　言

今日、我が国は少子高齢社会化や知識基盤社会化、グローバル化を迎えるなど社会の激しい変化に加え、東日本大震災からの復興という課題にも立ち向かっている。このような中、教育においては、伝統と文化を尊重するとともに、豊かな人間関係で満たされる社会を創るたくましい人間を育成することが求められている。

教育に携わる我々は、生徒の「生きる力」の一層の育成を目指すとともに、実社会とのかかわりを重視し、社会の形成者として生きていく力を育成しなければならない。そのためには、学校の教育力と教師の指導力を高め、校長自らリーダーシップを発揮し、学校教育の改革・改善を強く進めていくことが必要である。

東海北陸中学校長会は、本大会の成果を踏まえ、校長一人一人が学校経営の責任者としての立場を強く意識し、意欲的・創造的な教育活動を展開し、国民の信託に応えることを宣言する。

決　　議

第52回東海北陸中学校長会研究協議会愛知大会にあたり、以下の事項を決議し、その実現を期する。

一、人間尊重の精神に徹し、未来を切り拓く「生きる力」を育む教育に努める。

一、学習指導要領に基づく特色ある教育課程を編成・実施し、確かな学力の定着、豊かな心と健やかな体の育成に努める。

一、研修の一層の充実を図り、創造性豊かで、使命感に満ちた教職員の育成に努める。

一、家庭・地域社会、関係諸機関との連携を一層強化し、学習や生活の基盤づくりに努める。

一、安全・安心な教育環境づくり及び防災教育の一層の充実に努める。

一、「教科書無償給与制度」、「義務教育費国庫負担制度」及び「人材確保法」の堅持を要請し、教育水準の維持向上を期する。

平成24年７月５日

第52回東海北陸中学校長会研究協議会　愛知大会

あいさつ

東海北陸中学校長会研究協議会愛知大会
実行委員長　**溝　口　哲　夫**

昨年度の岐阜大会で再会をお約束してから、早１年が経ちました。今、私たち愛知の会員一同は、皆様に心からお礼を申し上げます。無事、愛知大会を終えることができました。本当にありがとうございました。

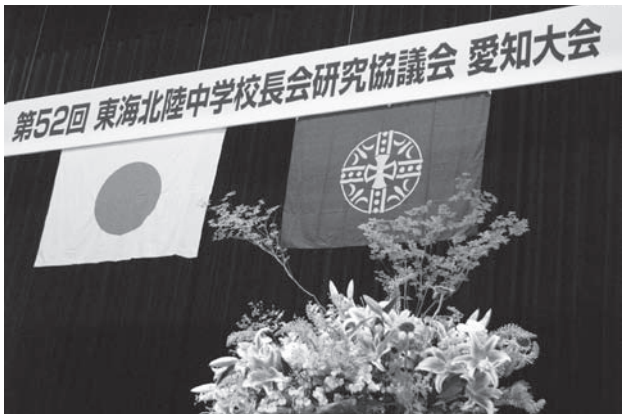
さて、一昨年度の富山大会、そして、昨年度の岐阜大会と素晴らしい大会運営を体験した私たちは、豊かな自然とおいしい食べ物に、日頃から堪能しておみえの東海北陸各県の皆様に、はるばる愛知までおいでいただき、２日間、どのようなことをしたら気持ちよく参加していただけるか、一生懸命考えました。

そこで得た答えは、おもてなしの心と、参加を実感できる分科会の設営でした。どんなに会場が立派でも、運営する者におもてなしの心がなければ、不愉快な思いしか残りません。また、他県の会員の方と直接意見交換をして、初めて成果や課題を自分のものとして実感できるのではないかと考え、分科会の中にグループ協議の時間を設定させていただきました。

結果として、愛知のほぼ全員の会員が、何らかの形で運営に携わり、愛知のおもてなしの心を皆様にお届けしたつもりではありますが、満足していただけましたでしょうか。「愛知にやらせてよかった」と言っていただき、「愛知でやってよかった」ということを合言葉にしてまいりましたが、自己満足に終わったのではないかと危惧しています。

どうぞ、お戻りになってからでも結構ですので、忌憚のないご意見をお聞かせいただきますようお願い申し上げます。

本大会から新しくなった大会次第を見ておわかりのように、これからの中学校教育では、主体的に実社会に関わろうとする日本人を育てなければなりません。昨日の分科会では、校長は学校経営の最高責任者として、どのような教育理念やビジョンを持つべきかについて、お互いに意見交換していただきました。



今大会で得られました成果につきましては、研究集録にまとめ、後日、皆様にお届けするつもりです。また、新たに生じた課題につきましても、それを明らかにし、次期開催県の福井県に引き継がなければならないと考えております。

いずれにしましても、開催県という貴重な機会を与えていただきましたことに感謝を申し上げ、そして、開催にあたり、さまざまなご支援、ご協力を賜りました関係各位の皆様に、心からお礼を申し上げ、あいさつといたします。

２日間、ありがとうございました。

あいさつ

福井県中学校長会
副実行委員長　**清　水　俊　之**

次期開催地福井県を代表して、一言ごあいさつを申し上げます。本来であれば、ここで福井大会の実行委員長である山岸がごあいさつを申し上げる予定でございましたが、事情のため都合が悪くなりましたので、私、副実行委員長をしております清水がごあいさつを申し上げます。

さて、先ほど閉会のごあいさつにもございましたように、昨日今日と２日間にわたる愛知大会が素晴らしい成果を残して終えようとしております。これまで準備から当日の運営に至るまで、ご尽力をいただいた愛知県の校長先生方には、心より敬意を表しますとともに、深く感謝を申し上げる次第でございます。本当にありがとうございました。

ご承知のとおり、来年度の東海北陸大会につきましては、第64回全日本中学校長会研究協議会と兼ねさせていただきます。これまで、平成22年度に福井県で準備委員会を立ち上げまして、昨年８月からは、実行委員会として準備を進めているところでございます。

開催日でございますが、来年平成25年10月24日、25日、この２日間を予定しております。会場としましては、福井市のフェニックスプラザをメイン会場としまして、全国から約2000名の中学校の校長先生方の参加を予定しております。

福井大会では、今年度から新たに全日中研究協議会の研究主題となりました、後ろに掲げてあります研究主題「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え、社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育」を引き継いでいきたいと考えております。

さらに、東海北陸大会のこれまでの成果並びに今年10月に行われる全日本中学校長会研究協議会大阪大会の成果の二つをしっかりと踏まえて、新たな課題の解決に向けて研究を深めてまいりたいと考えているところでございます。

なお、記念講演の講師には、福井県にゆかりの深い人物をお迎えする予定をしておりますので、どうぞご期待いただきたいと思います。

最後になりますが、福井県中学校長会は会員数が74名という、これは全国で46番目の少ない会員数でございます。そのため十分に準備、運営ができるかどうか、大変不安を感じているところでございます。しかしながら、こうした小さい規模である校長会ということでチームワーク、そしてフットワークのよさを十分に生かしながら、「夢と希望、熱き教育福井から」これをスローガンとして、先ほども出ておりましたけれども、おもてなしの心を大切にしながら、誠心誠意、頑張っていきたいと思っております。

ご参加の皆様には、東海北陸地区の仲間として絶大なるご協力、ご支援をお願いしたいと思います。

それでは、来年、福井大会で皆様と再会をすることを楽しみにしながら、簡単ではございますが、次期開催県のあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

あとがき

過日開催の第52回東海北陸中学校長会研究協議会愛知大会では、東海北陸７県から1,100余名の会員の皆様にご参集いただき、熱心に参加していただきましたこと、改めて感謝申し上げます。「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育」という新たな研究主題のもと、活発に研究協議がなされ、多くの成果を上げることができました。とりわけ、分科会の中で初めて取り入れたグループ協議では、「多くの会員と意見交換ができ、大変有意義な時間であった」という声をたくさんいただきました。

ここに、第52回東海北陸中学校長会研究協議会愛知大会の総括としてまとめさせていただいた研究集録をお届けいたします。この集録が、今後の東海北陸地区における中学校教育の一層の発展に寄与するものと確信しています。

最後になりましたが、本大会の「大会誌」「研究集録」作成にあたり、ご支援、ご協力を賜りました会員並びに関係各位の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、次期開催の福井大会の更なる発展をご祈念申し上げ、お礼の言葉といたします。

第52回
東海北陸中学校長会研究協議会
愛知大会

平成24年７月５・６日

発行者　東海北陸中学校長会
編　集　愛知大会実行委員会
印　刷　株式会社カミヤマ